

序章 吸血鬼伝説とこの世界

血を吸う鬼と書いて、吸血鬼——吸血鬼。夜な夜な墓場から出てきて、寝ている人の喉に噛み付き血を吸うと言われるこの化け物は、映画や小説、ゲーム、ドラマを通じてよく登場し、西洋の化け物の中で最もなじみ深い存在である。

この事情はこの世界でも同じで、つい最近までその存在はこの世界においても完全に架空の存在だと思われていた。私たちの世界に比べてはるかに多種多様な人種が存在していてもなお、である。

この世界は多様すぎる人類が存在しているがために、それによる人種差別も尋常ではなかった。

この世界には大きく分けて二種類の人種がいる。一方はトランス型といい、もう一方はツール型という。前者はかつて「獣人」と言われ、後者はかつて「真人間」と言われたように、トランス型は鳥や獣に似た姿をもつ人々であるのに対し、ツール方は一見普通の人間の姿ではあるが、トランス型より強大な魔力を持つ人々である。だが、彼らは人類学的、遺伝学的には同じ人類「ホモ・サピエンス」であり、両者を分けているのは人類共通に備わる魔力の使い方だけである。姿の変形 (transform) に使ったのがトランス型、あくまで道具 (tool) として使ったのがツール型である。

両者は環境への適応の違いから、かつて別々の文化圏であったのだが、ツール型がヨーロッパを中心に勢力を広げ、トランス型は住む場所を追われたり奴隷にされたために、ツール型の社会に加わることを余儀なくされた。そして、十八世紀あたりにトランス型が持っていた部族形態が完全に崩壊され、トランス型とツール型は同じ環境で暮らすこととなった。しかし、トランス型はもっぱら差別の対象であり、一九六〇年代によくやくトランス型もツール型並みの人権が得られたのである。

よって、ツール型中心社会でいう「風変わりな人間」というものはこれではなくなったはずなのであった。

だが今でもトランス型への不当な扱いはなくなつたわけではない。もとから人口がツール型に比べれば少ないので、もの珍しい目で見られたり、社会貢献度が低かったりするので。しかし、もしあまりに不当な扱いを受ければ、人権団体に訴えることができる。

そんな中、人権団体に訴えることすらできない人々がいる。それが吸血鬼だ。

こう書くと、まるで吸血鬼を悪者扱いしていない、むしろ哀れに思っているように思えるが、事実そうなのである。

彼らの存在は極めて薄く、冒頭でも述べたように架空の存在だと思われているのが事実だった。それゆえ、吸血鬼に関する伝説や迷信も同時に植え付けられていたのだ。

そんな世の中にさいなまれ、長いこと人とかわるのを避けて生きてきた青年がいた。彼は自分の身を厭いながらも、ある日、自分の身に起こっている真実を探ろうとし始める。これは、そういう物語である。

第一章 過去との別離

「ギャ——っ!!」

とある満月の夜、暗がりから一人の少年が飛び出してきた。ぼろい麻布のマントを羽織ったその少年は、悲鳴に導かれて町に現れた人々から逃げた。

「出たぞ！ またあの悪魔少年だ！」

人々は大きな懐中電灯を照らし、首に十字架やニンニクをぶら下げている。

「また人が襲われた……これで十人目だ……」

町を見下ろしている人の一人が絶望的につぶやいた。

「二十一世紀世の中とはいえ……やっぱりあいつは我々の敵だ!!」

「被害者が出るんだ、当たり前だ！」

もう一人の人物はこぶしを握っている。

「噛み傷を跡形なく消して証拠を消すなんて、なんて性質の悪い化け物なんだ……」

少年は息を切らして全速力で街を駆け抜けていた。

どこまで走っても街の明かりが見え、彼は焦っていた。

だがやがて彼は、前方に真っ暗な森があるのを見つけた。

—— 見えた！ 母さんの森だ！

彼は安堵の表情を浮かべた。やっと逃げられると思ったその矢先……。

「逃げられるとも思ってるのかよ、小僧」

前方に大柄な男が立ちはだかった。

男は少年の胸ぐらをつかんで軽々と持ち上げた。

のどにキラリと光る刃物を突きつけ、罵った。

「逃がすものか、この吸血野郎！ 貴様の喉をこれで切り裂いてやる！」

ザシユツ！

「ああああああああああああ!!」

少年は悲鳴を上げた。目の前が、真っ白になった。

「ああ!!」

悪夢から目覚めて飛び起きると、そこはいつもの自分の部屋。遮光カーテンの下から日光が差し込んでいる。

青年はカーテンを素早く開けた。眩しい朝日とともに、見慣れた街並みが見えた。

ハアくと彼は大きくため息をつき、顔に手を当てた。

透き通るような白い肌が日光を反射させる。

「……………またか……………あの夢」

彼は眉間に深いしわを寄せた。

—— 青年の名はルイス・アルノフ。夢の中の姿とは打って変わってすらりと伸びた身長、男らしさを見せるたくましい体つきから、おそらく二十

代前半と思われる。

先ほどの夢は彼が十二歳だった時の過去である。

彼は実は吸血鬼だったのだ。

しかし、なぜ自分が吸血鬼になってしまったかわからないし、それ以前の

記憶も、自分の本当の家族の存在も、知らない。

あのころは定期的に人里に姿を現して人から血を得ていたのだが、最近になつてからは血を得ることは全くなくなつた。そして、昔は森に住んでいた

のだが、今はそうではない。

ここはイングランドのC都市にある小さなアパートの一室。

この建物を含めて、この街にはやれ築五〇〇年だの六〇〇年だの長い歴史

をもつ建物ばかりが建っている。

彼の住んでいるアパートも決して新しくはない。しかし部屋の中はその面

影を見せず、白い壁紙に現代的な照明、家具が置かれている。彼の部屋には、

もう一つ意外なところがあるのだが、これはおそらくこの部屋だけだろう。

ひよっこり、彼のベッドに小さなかわいらしい動物が二匹、登ってきた。

どちらもイタチ科と思われる。

こげ茶色と白の毛皮に、ピンクの鼻。二匹はフンフンと鼻を動かして彼の

こげ茶色と白の毛皮に、ピンクの鼻。二匹はフンフンと鼻を動かして彼の

様子をうかがっている。

不意に顔を上げ、ルイスの顔を見つめた。丸くて大きな、つぶらな瞳がなんと愛らしい。

この動物たちは、ルイスが住んでいた森からやってきた。二匹は彼のことを昔から好いており、彼が森を離れるときに付いて来たのだった。

彼はその可愛さに思わず笑顔を見せる。あまりはつきりを歯を見せているわけではないのだが、薄桃色の唇の下から、やや湾曲した牙が見える。

「大丈夫だ」

彼は低く穏やかな声で言い、二匹の頭を優しく撫でてやった。

「それよりお腹すいてるだろ、ちよつと待ってて」

彼は下着一枚のままベッドから降り、彼らのエサを用意した。

銀色の器にエサを盛って運んでくると、さすがは動物、喜んで近づいてきた。

二匹がガツガツ食べている傍ら、ルイスはトーストを食べていた。

ざつとシャワーを浴び、着替え、靴ひもを結んで大きなシオルダーバッグを提げると、ドアノブに手をかけて動物の同居人たちに「行ってくる」と言った。すると二匹は見送りをするように玄關に来た。

「外へ行きたくなかったら、いつでも此処の出入り口使えばいいからな」

と言って彼が指し示したのは、ドアノブの下で渦巻く謎の円。どうやら、動物たち専用の出入り口のようなのである。

部屋を出てまず彼が目を向けるのは郵便受け。差し込まれている新聞を引き出し、抱えた。

共同の階段を駆け下り、共同のドアを開けて彼は外へ出た。

行き交う人々に目もくれず、彼はたった一つの目的地の方だけを向いて速足で歩いていった。

彼が向かった先はまるで中世の古城を思わせる巨大な建物。しかしそこには、彼と同世代の若者たちも次々と集まってくる。

門の脇にはおびただしい数の自転車。ここへ日常的に通う人が多いことを伺わせる。

レンガ造りの門をくぐる若者たちの中には、やけに急いだように小走りで

通っていく人たちもいる。

「ねえ、今日二時間目休講だったけ？」

「あつそうだ、今度のレポートのための本貸してよ」

「あのさあ、生態学の総生産量ってなんだっけ？」

授業や学問を思わせる会話が飛び交っている。

そう、実は此処は大学なのである。しかもC大学という理系分野の名門校の名門校。その中でもルイスが向かったのはこの大学のSカレッジ。ここは工学部のカレッジである。

日本で多数の学部を持つ大学というと、一つの広いキャンパスの中にすべての学部が集中し、学部ごとに違う建物が建っていることが一般的だが、イギリス、とくに彼が通うC大学の場合、学部や分野によってそれぞれ独立した小さな大学（カレッジ）が存在し、それを全部ひっくるめて「大学」と呼ばれるわけである。この大学には、およそ三十のカレッジが存在し、ルイスが通うのはその一つである。しかもこのカレッジは毎回定期テストの平均点がいいのだという。

吸血鬼が理系というのも妙な話であるが、彼は吸血鬼といえども別に日光は平気だし十字架も怖くない——むしろよく十字架の描かれたTシャツを着ているし、ニンニクも苦手ではない。苦手なのはタマネギだった。切るときに涙が出る物が食べ物であることが信じられないらしい。

しかし、この世で彼が一番恐れているのは人だった。彼自身、人里で暮らしているのはあくまで此処で学問を享受するためだけであり、人に慣れるためではないと思っている。人から血を得るのも、決して彼が望んでやっていることではなく、得なければ瀕死になるほどの苦しい禁断症状のようなものが表れるからだだった。人から血を得ることで恐れられ、攻撃され、また彼自身誰かの体を傷つけなければ生きていけないことにとて辛さを感じていた。ところがそんな彼の気持ちをよそに、なぜか彼はよくこの女子学生に声を掛けられていた。

彼は細面で器量が良く、どこか謎めいている雰囲気醸し出しているため、女子学生の間で人気があったのだ。彼は基本「金髪」という分類に入れられる髪色をしているが、ハニーブラウンに近い感じなので眉毛がくつきりし、

整った顔立ちをさらに際立たせていた。また彼のまっすぐな髪は真ん中分けでセミロング。長い前髪がよく顔にかかっているため、堀の深い目元がちらちらと見えていた。それもまた、彼の謎めいた様子を強調させている。

「おはよ、ルイス君」

今日もまた誰かに声をかけられた。その声に彼が答えるはずがない。

「無駄よ。アイツはお高いヤツなんだから、挨拶したって見下されるだけよ」

誰かがそう言っていた。

女子学生に人気があるとはいえ、彼が無愛想でつつけんどんであることを知っている人たちは彼を避けていた。しかしこうであるほうが、ルイスにとって安心なのである。

こんな彼であるが、唯一心を開いている人物がいた。

「おはよう、ルイス」

「ああ、おはよう」

彼が笑顔で答えた人物は、アルタシア・マゾフという名の同級生の青年。身長はルイスより若干低く、鼻が少し低くて目もくりつとした童顔なため、同じ年には少し見えにくい。耳がリスのような獣耳なので、小動物的な風貌である。

アルタシアはルイスの人としての唯一の理解者だ。

子どものころから二人は仲が良く、ルイスが森で長年（本人いわく十年程だとか）住んでいたにもかかわらず、超難関私立大学に入れたのは、アルタシアのおかげであると言っても過言ではない。彼は授業を録音や録画して見せたり、直接勉強を教えてくれたりしたのだ。

そして、ルイスが血を得なくても平気になったのは、彼と出会ってからである。二人が出会ったのはお互い十二歳のとき。ルイスにとっては、夢で見たあの事件の数日後だった。人に捕まって命からがら逃げ出し、行き倒れになったところをアルタシアが発見されたのだ。

アルタシアは以前から彼のことを知っていたが、特に恐れる様子もなく彼を助けてくれた。安全な場所へ避難させ、食べるものと水を与えた。

助けられた当初、ルイスはアルタシアが自分の正体を知らないのではないかと思っていた。しかし、アルタシアが彼の正体を知っており、それでいて

自分を助けてくれたことを知ると、彼は一気にアルタシアに心を開いた。今に比べてまだ疑り深くない時期だったため、二人は友達になれたのだ。

しかし、アルタシアがルイスから血を吸われたことがないわけではない。ほかに噛まれて吸血鬼になった人がいないことを知っている彼は、ルイスが血を欲しがったときに快く血を提供した。

またルイスは、人に噛み付くときは必ず手首だった。先ほども述べたが、彼が血を得るのは望んでやるのではなく、生きるためである。だから伝説のように喉に噛み付くといったような大胆なことはできるわけではない。

それにしても、何故アルタシアはルイスを恐れないのだろうか。そのことを、当然ルイスは訊いた。彼はこう答えた。

「初めは怖いと思ったよ。でもね、人を傷つけるのが好きな人がいるはずがない、僕はそう思った。君が血を吸うのも、決して好きでやってるんじゃないだろう？ 僕はそう信じてるよ」

この言葉が、どれほどルイスに安心感を与えたことだろう。実はこの言葉を聞いてから血を吸う回数は一気に減ったという。

さて、話は現実に戻る。森を出ても家族のいない彼は生活費を稼ぐため、飲食店や雑貨店でアルバイトをしていた。生活の事情や、彼の学力で学費は免除されている。平日に稼げる額は僅かしかないので、夏休みや冬休みなどの大型連休で長時間働き、貯めている。しかしこれでも不足することがあるため、アルタシアも協力していた。そして、稼いだ分の半分かもしくはそれ以上をいつも、給料日の翌日にルイスに渡していた。森で暮らしていたときに一緒に遊んでくれたり勉強を教えてくれたりした上に、一緒にアルバイトをして稼いだ分を分けてくれる友人のことを、彼はいつも感謝していた。

だがそんな彼の様子を、アルタシアはいつも照れた様子で「何言ってるんだよ」と突っ込んでいた。

その日の昼は、二人で一緒に昼食に行った。カレッジからそんなに遠くないファーストフード店である。森で暮らした経験が長いルイスは、大学に入りたてのころは人間社会で食べられているものがなかなか馴染まなかった。ずっと無塩、無糖生活だったため、人が食べるものというのはなぜこんなに

しよっぱくて甘ったるいのだろうと、いつも渋い顔で訓練していた。今——
——大学三年生となってからはほぼ普通の人と同じものが食べられるようになったが、真新しい食べ物やくだい味のするものには相変わらず消極的である。

一緒に食事をするのは久しぶりである。仲がいいからと言って、受講する授業やゼミが同じわけではない。学科は同じ魔術工学科（魔法と科学技術を統合した新しい技術の概念や開発について習う）だが、必修科目以外の科目やゼミが多いため、一緒に受講することは決して多くない。そのため今日は、初めのうちはお互いが取っている授業の話をしていった。

そのうち、アルタシアが思い出したように言い出した。

「そういえばそろそろ進路考えないと。ルイス、どうするの？」

その質問に、ルイスはしばらく戸惑っていた。

「……まだ考えてない」

まだ世の中のことを知らない彼である。また森に帰ろうかなあとも考えているが、「人間なんだから本来の人間らしい生活した方がいいよ」と前にアルタシアに言われたことや、せっかく森から離れて町での暮らしに慣れたのにという気持ちもあり、なんとも言えない状況である。

ただ最近では、あまり人と関わらない仕事に就くことかなあと考えてもいるのだが……。

アルタシアは某開発企業に就職しようと考えている。大学生になってからずっと働きたいと思っている会社だ。

「仕事に就くとね、会える時間も減っちゃうとは思うけど、ずっとやりたいと思ってる仕事なんだよ」

しかしやはりルイスのことを心配しているアルタシアである。

「それは構わないよ。僕のせいで君がやりたいこともやれなくなるようじゃこっちも辛いし」

彼は親友の顔をじっと見つめながら言った。と、そう言った直後、大学卒業後のことがまだ全然見当もつかない彼は、薄味にしてもらったフライドポテトをくわえながら窓の外を眺めて不安になった。

そんな不安をかき消したいかのように彼はこう切り出した。

「でもさ」と言いかけ、口の中に入れていたものを飲み込むと、アルタシアに向き直った。

「アルタシアと出会えたから考えられるんだよ」

今のルイスの表情を他人が見たら、彼はゲイではないかと思ってしまうだろう。それほどまでに彼は親友を大事に思っていた。

「じゃあまたあとで」

食事を済ませた二人は手を振った。

「あ、アルタシア」

背を向けた彼をルイスが呼び止めた。

「なんだい？」

軽く微笑むアルタシアに、ルイスは真剣な表情で言った。

「もし君の身に何かあったら、僕が絶対に守る」

しばらく沈黙が走ったが、その後アルタシアは吹き出した。

「はは、なんだよ『何か』って。『守る』とか大げさだな」

「うん、まあな。でも、こんな僕だから……」

言いかけて俯いた。するとアルタシアは近づいて肩に手を置いた。

「大丈夫だよ。君は悪い奴じゃない」

手でポンポンと肩をたたき、慰めた。

「じゃあな。次の授業遅れるなよ」

「ああ」

二人は別々の方向へ向かった。

だが今後、本当に大事件が起きてしまうとは、さすがのルイスも考えていなかった。

第二章 癒えぬ傷

ひとりの男が、暗い部屋の中でパソコンの画面を睨み付けていた。

映っているのは何処かの地図。

「このまま逃げ切れると思ってるのか……レオナルド」

そこへ彼の部下らしき人物が入ってきた。

「準備が完了しました」

「ああ、ご苦労だった。ありがとう」

男に笑みが表れた。

「これで私の過去が清算できる。あの男さえこの世から消えてくれれば、私の全ての苦しみが消え去るんだ。——始めよう」

ある日の昼下がり、C大学のとある女子学生は本屋に来ていた。

ここはよく学生がやってくる書店。学術書や小説、雑誌、いろんな分野の棚で学生たちが立ち読みしている。

今日彼女がやってきたのはファッション雑誌を買ったためだ。普段勉強が忙しいため、こうやって時間の余裕が出来た時に雑誌を買うのが彼女の楽しみだった。

彼女好みのファッションが載っているものを選ぶと、軽く胸を躍らせてレジへ向かった。

「いらっしやいませ」

店員がぶっきらぼうな声で挨拶した。

「ん？」

その声には聞き覚えがあった。

「あ、ルイス君？」

彼女はぼつと笑顔になった。

ルイスは白いTシャツに青いエプロンをして突っ立っている。彼は無表情で彼女と目を合わせない。

女子学生がレジの台に置いた商品を機械的に受け取ってバーコードを読み込ませ、価格を伝えた。

だがこんな彼の態度に、なぜか彼女は嫌悪感を覚えない。

「ルイス君この間文房具屋にもいたよね。段ボール片づけてるとこあたし見たよ」

彼女は積極的に話す。しかし目の前の店員はうるさそうに口をへの字に曲げ、むつりとしてしている。ハニーブラウンっぽい金髪の長い前髪のせいで顔の上半分はよく見えないが、かなり機嫌が悪いのはわかる。お金を少々乱暴に受け取り、金額を入力して出てきた引き出しにお金を素早く入れ、おつりを渡した。それも手にはなく、レジの台に。雑誌も袋に入れて、一応客への対応としての決まりなのか、袋の手提げ部分を彼女の方へ向けた。

「ありがとう」

彼女は彼が目を合わせてくれるわけがないと知りつつも笑顔で受け取った。彼女はルイスのことを気に入っている女子学生の一人である。しかしほかの人と違い、彼がぶっきらぼうで無愛想であっても嫌な奴だとは思わない。

彼女がそう思うのには理由があった。

ある休日、彼女は買い物から帰る途中自転車のバランスを崩して転び、買ったものを道にぶちまけてしまったが、そのとき真っ先に駆けつけて最後まで拾うのを手伝ってくれたのがルイスだったのだ。女子学生の礼の言葉にうんともすんとも言わなかったが、彼女はとても嬉しかったため、それ以来彼を信用しきってしまったのだ。

日曜日の夕方、買い物帰りの彼女はルイスが雑貨店の裏から出てきたのを見かけた。スポーツメーカーのインシヤルが入った大きいシオルダーバッグをかけ、黒い革のジャンパーにデニムのパンツ姿は、ルイスの好む格好である。彼女を知っている。だから、ほんの一瞬見ただけでも彼女には彼だと分かった。彼女は彼と反対の方向へ行く予定だったが、話しか携帯電話のために敢えて彼と同じ方向へ向かった。

彼がコンビニに入り適当に何か買って出てきたところを狙って彼女は声をかけた。

「お疲れ、ルイス君。いろんなところでバイトしてるんだね」

「あんた誰？」

彼はちらりと彼女を見やったがすぐに顔を背けた。

「あら、わからないの？ 何度も会ってるじゃない。エミリーよ」とは言いつつも、名乗るのは実は今日が初めて。つい馴れ馴れしく言ってしまった。

そのことに全く関心がなさそうなルイス。彼は駐車場の塀へ向かい、そこでさっき買った缶コーヒーを開けた。パカッと缶が開く音がエミリーにとって彼の魅力を引き立てたのだった。

「何の用なんだ？」

平坦な口調で彼が訊いた。夕焼けを見つめながらコーヒーをすすする。

「通りかかっただけよ。ルイス君がいたから声かけただけ」

「嘘だな」

彼女が言った直後に彼は言った。

「僕が店から出てきたところをすかさず付いて来たんだろ？ わかるんだぞ。そういうことは」

「えへ、わかる？」

彼女はいたずらっぽく笑い、ペロツと舌を出した。

ルイスは長い前髪を垂らして無言でコーヒーを飲み続けていた。

「ねえ、ルイス君？ ちょっと話があるんだけど、いい？」

「……………」

「聞こえた？」

「何だよ？」

いまのきつめの彼の返事で、ようやく彼女は今彼が相当気分が悪いことを察した。

「これ以上私に抵抗しなくてもいいのよ」

彼女がそう言うと、彼の手がピタッと止まった。

「みんなルイス君がお高いヤな奴だつて言ってるんだけど、あたしはそうじゃないってわかってる。本当は優しい人だつて知ってるのよ」

「……………」

エミリーは彼と同じ方向を向き、つぶやくように言っていた。しかし彼からの反応がないため、ちらりと彼の顔を見た。

やはり長い前髪でよく見えない。しかしかすかに見える口元は、妙にこわばっていた。

「だからね、ルイス君がああいう態度取るのは何か辛いことがあるからだと思ふのよ。だからもし辛くて耐えられなかったら、いつでもあたしに話して。力になるわ」

「余計な御世話だ」

彼女が言い終わる前に彼が断言した。顔を夕焼けに向けたまま顔を上げた。

「僕はむしろ、偉そうだと思われてるほうが安心なんだ。あんたみたいな人がいるほうが、よっぽど落ち着かない」

「…………え？」

彼の発言に、硬直したエミリー。

「別に気にしてくれなくてもいい。僕は自分のことは自分で何とかできる。通りすがりのあんたに頼ることは一つもない。——もう解放してくれないか」

「解放してくれ」の言葉が彼女の胸に突き刺さった。彼が本気で彼女を嫌っており、今までつき合わされ、束縛されていたと彼が感じていたことがあらわになったからだ。彼女がショックで動けなくなっている傍ら、彼はコーヒーを飲みほし、空き缶をかごへ投げ入れその場を去った。

その夜、ルイスは携帯電話を取り出した。携帯電話に登録されたアルタシアのアドレスを探すと、電話をかけた。まだ十一時前である。現代の若者がこの時間に寝ることは少ない。事実、アルタシアもそうである。

かけてから五秒ほどで彼が出た。

「もしもし？ どうかした？」

いつもと変わらない様子である。

「やあ、アルタシア。こんな時間に悪いな」

いくら起きているとはいえ、電話をかけるのにはやはり遅い時間帯だ。しかしメールはもつと遅くても平気なのである。

アルタシアの声を聞いて、さっきまで抑えていた気持ちがどっと押し寄せそうになったが、そこをぐつとこらえて、明るく言った。

「いや、暇だからいいんだけど、なんかあったのか？」

さすがはアルタシア、ルイスの明るい声にも隠しきれない部分を読み取っている。

「……ちよつと、今日やな奴に会った」

「んん？ どういう人？」

ルイスは少し間を空けて話す。

「なんだかやたらと僕に馴れ馴れしい態度をとる女子がいたんだ。どうもうちの大学と同じ学生みたいなんだけど……」

「馴れ馴れしい」って、具体的にどんな行動？」

「僕に会うたびにやけに親しげに声をかけたり、僕の跡ついたり、とにかく僕に接近したい様子なんだ」

しかし、こういうことで愚痴ることはめつたにないルイスである。今彼が愚痴ったことを、アルタシアは妙に感じていたのか、彼は少し驚いた様子だった。

「君がそんなことで僕に話すなんて珍しいな。イヤなことがあったって、そんなに君は愚痴らないだろう」

「違うんだよ。僕が嫌だと思ってるのはそういう態度を取られたことじゃない。その行動が……もし、僕の正体を知っててやっつてることなら……」

「監視されてるかもってことか？」

「そうだ」

するとしばらくアルタシアから返事が途切れた。何か考えているのだろうか。

「こんなこと言ったら君は僕を薄情者と思うかもしれないけど、今の考えはいくらなんでも考えすぎだと思っ」

「うんん？」

ルイスは少し唸るような声で聞き返す。

「君が女子に人気があることは僕も知ってる。だから君が厭うような行動をとつても、中には君のバックグラウンドを察して嫌がらない人がいてもおかしくないはずだ。君の正体を知らなくても、何かあったんだろうと考えて」

「でも……」

「あんまり気にしすぎると胃を悪くするぞ」

アルタシアは少し冗談を込めて言った。

「でもあんなに接近されたのは初めてだ。なんだかやっぱり気味が悪い……」
やはり腹の内がすっきりしないルイスだった。

ルイス……いや、こういう話のときは本名で呼ぶんだったね。レオナルド

ルイス・アルノフという名は、実は仮名だった。吸血鬼として誰かの血を

飲まなくなつても平気になったとき、過去と決別するために名前を変えようと思ひ、この名前にしたのだが、アルタシアと内面的な話をするときだけは本名で呼んでもらうことにしていた。彼の本名は、レオナルド・エティドである。

「いくら君と付き合ひの長い僕でも、ビビリすぎだと思っよ。レオナルド、昔からそうだけど、君は人を恐れすぎてる。もう少し気楽に過ごしてもいいんじゃないかと思っ」

その言葉を聞いてルイス——レオナルドは泣きそうになった。

「……そんなこと出来ない、怖い」

震える声で小さく訴える。

「出来るものならそうしたい。もうこんな息苦しい生活はいやだ。もつと気楽に、楽しく暮らしたい。でも、出来ないんだよ。僕は吸血鬼という罪深い存在で、ずっと人に迫害されて生きてきた。今は誰の血も吸わなくても平気だけど、またいつ吸いたくなつてしまっかわからない。それに、どこかで僕

のことを知って憎んでる奴も絶対にいるはずだ。それが誰だかはわからない……だから妙な行動をとる奴がすごく気がかりだ……」

「気持ちわかるよ」

アルタシアの重苦しい声が聞こえる。それはまるで、助けたくても助けやれないもどかしさをかみしめたような口調だった。

「君は罪深い存在なんかじゃない」って言いたいけど、君を悪い奴だと考えて、憎んでる人間は確かにいるかもしれない。でも、そればかりを気にして暗く時を過ごすか、最低限度の注意だけ払って軽く受け流すかを考えた時、同じ人生なら後者を取った方がいいじゃないか？」

確かに彼の言うことはもつともだ、とレオナルドは本能的に思った。しかし、世の中を知らない彼はどの程度気を緩めればいいのかわからない。しばらく考えてから彼は言った。

「僕だって本当はもつと多くの人と仲良くしたい。でも、怖いんだ。何度も迫害された経験があるから、目の前の人の方が優しい顔しててもいつか牙をむくんじゃないかって気がして怖い。僕が自分に感じよくしてくれている人たちと仲良くしたくない気持ちには、どうせ裏切られてしまうならいっそのこと仲良くしないほうがまだというのもあるんだ。……もう、手遅れかもしれないんだよ、アルタシア」

彼は小粒の涙を頬に伝わらせた。そして僅かに「ううっ」と嘆いた。

アルタシアはしばらく間をおいてから返事をした。

「吸血鬼は魔物じゃないよ。この世に存在してて、なおかつ本人の君がこんなにも辛い思いをしている。それでいて、どうして吸血鬼は悪魔同然になるんだ？ きつとわかるよ。吸血鬼がなぜ人の血を求めめるのか」

第三章 畏

ある日、ルイス——本名レオナルドは、大学のレポートに必要な参考文献を探しに図書館に来ていた。理工学関連の書棚へ向かう途中、彼は怪奇小説の置かれた棚の横を通り、一冊の本に目をとめた。

タイトルは「血と涙」というものだった。表紙には顔色の悪い美男子と、あどけない顔の少女が抱き合ったイラストが描かれている。美男子の唇は、少女の首に接近している。まるで伝説の吸血鬼のようだった。

彼は妙な興味を抱き、本を手にとってそのまま立ち読みした。

それは吸血鬼と人間の禁断の恋を描いた悲劇小説だった。表紙絵に描かれた顔色の悪い青年は吸血鬼。ある時気づいたら彼は吸血鬼になっていて、何十年生きても老いることなく若いままの姿だという。物語の中では、既に青年は一五〇歳を超えているという設定だった。耐えることのない血への飢えに苦しみ、何人も人を殺してしまっているという。長生きするうちに人間としての感覚が麻痺し、若い女性を見ると「おいしそう」と思えるようになってしまったとか。そんなある日、青年は一人の孤児の少女と出会う。彼女の身の上を気の毒に思い、しばらく面倒を見ていたが、やがて彼は少女に恋をしてしまった。飢えはより一層強まり、しかもほかの人の血をどんなに吸っても心は満たされず、彼は殺人鬼と化してしまうという話だった。

こんなに一生懸命読んだのに、結局はそういう始末かよ、とレオナルドは失望し、力の抜けた手でゆっくり本を戻した。腕時計を見るとすでに一時間半を超えていた。彼としてはまだ二、三分しかたっていないように感じられた。

「ばかばかしい……」

彼は思わずぼそりと独り言をこぼした。近くに人がいなかったことが幸いであつた。吸血鬼の話を読んだ本物の吸血鬼は、世間がどれほど吸血鬼のことを知らないか実感した。

彼は人の血を吸って人を殺したことなどないし、その人を吸血鬼にしてしまったこともなかった。また、自分は着実に成長していることも彼は知って

いた。友人のアルタシアの容姿の変化とともに、自分の体も変化していることに気づいているからだ。背も確実に伸びていて、大学の健康診断で、ここ三年間で約五センチも伸びた。また、彼は誰からも一度も「顔色が悪い」と言われたことはない。せめて言われたときといえ、徹夜したときや体調を崩した時ぐらいである。

そうこう考えているうちに、彼は、子どもの頃人々に迫害されたときのことを思い出した。それを必死で忘れようと彼は頭の中でもがいていた。そのため、今日はもう参考文献を探すどころではなくなってしまった。

図書館を後にして、外の空気を吸うと彼の気持ちは少し治まった。この日は他にいろいろ面白い物しなくてはならない日だった。せつかくの休日だからだ。

貧乏でバイクや車も免許もない彼は自転車にまたがった。しかもそれは中古の自転車で、こぐたびにカタカタと危なっかしい音が響く。

ホームセンターやスーパーをまわり、買い物を終えた時には彼の自転車にはたかさんの買い物袋がぶら下がっていた。不安定にゆらゆら揺れ、いつ転倒するかもわからないありさまである。

帰るころにはもう夕方、仕事を終えた人が行き交っている。自動車も多く通り、信号待ちの交差点では車が数珠つなぎになっていた。

空は赤紫色に染まり、歴史の面影を残した建物も同色系に染まっている。通りに面した一階部分の店の明かりがぼつぼつと点き、もうすぐ明るい夜がやってくることを知らせているようだった。

彼は歩道と道路の間の狭い部分を縫うように自転車をこいだ。おんぼろ自転車に重い物袋を多く提げて、カタカタ物音を立てながらゆさゆさ揺れている不安定さに、心配して振り返る人もいた。

今日は隣町までやってきたので、帰宅するのになん時間がかかった。アパートに着いたころにはすっかり日は落ちていた。アパートの前を通る人も少ない。

街灯がぼつぼつと光っているだけで、あとは真つ暗だ。迷信深い人が来たらお化けが出るだろうと思うほど、静まりかえっている。

しかし今日の静けさはいつもと違う。あまりにも静かすぎる。なんか妙だ。彼はそう感じていた。

そのときだった。

「キヤ——!!」

女性の悲鳴が聞こえた。彼が本能的に声のした方へ駆けていくと、ひとりの三〇代くらいの女性の前に巨大なクマがいた。女性は腰を抜かして大きくのけぞっている。恐怖のあまりに動けなくなっていた。

クマの体長は二メートルはあり、全身真っ黒だ。突き出た鼻先を小刻みに動かしながら地面のにおいをかぎ、女性にじりじりと寄っていく。おそらく女性が持っている大きなカバンが気になるのだろう。

レオナルドは鋭い嗅覚で、女性のカバンの中にフィッシュチップス（タラのフライ）が入っていることに気づいた。その匂いにクマは誘われているのだろうと彼は悟った。

映画やドラマのように、「ウォーツ」と叫びながら襲ってくることはない。しかし腹を空かせた動物が気が荒くなるのは事実だ。この女性を放っておいたら、そのうち致命的なパンチを食らってカバンを取られてしまうだろう。

まさにそのとき、クマが女性に飛び掛かろうとした寸でのところでレオナルドが間に入った。彼は暴力は好きではないが、女性を助けるために無意識のうちにクマの腹を蹴とばした。クマは五メートル先まで飛ばされ、腹が痛いせいか動きが鈍くなった。

そんなこのクマの様子を見て彼はしまったというような表情をした。あつけにとられる女性に気づかず、彼はクマに近寄った。

「すまない。強く蹴りすぎたな」

うすぐまるクマの背中に触ろうとしたとき……。

パンツ!

クマが鋭い鉤爪で彼をはたいた。彼はその場に倒れた。

「キヤ——!!」

背後の女性がまた叫んだ。

彼は頬と左腕に怪我をした。大きなひっかき傷から赤黒い血が染み出ている。

するとどうしたことだろう。クマは彼の身を案じるように彼に近づいてフンフンとおいをかいだ。そして、彼の傷口をペロペロと舐めはじめた。

「ありがとう……やっぱり君はいい子だ……つつ……どうして此処に？森に食べ物が無いわけじゃないだろう？」

レオナルドの傷はみるみるふさがっていく。しかしこれは、クマが舐めたからではない。

「大丈夫だよ。僕は特殊だから、こんな傷ぐらいすぐに治る。心配してくれてありがとう」

彼は優しくクマの頭を撫でた。

「よいしょ」

ゆつくり起き上って、クマを導いた。先ほどの自転車のところまで案内し、袋の中から魚のパックを出した。ビニールと剥がし、クマからしてみればあまり大きくない魚の切り身二つ与えた。クマは切り身にがぶりつき、あつという間に平らげてしまった。

「どうして君は此処に？森から此処までかなり遠いだろう？」

だが、言葉を持たないクマは無言である。

「あの……、大丈夫ですか……？」

先ほどの女性が彼のすぐ後ろにいた。

「ええ。大丈夫ですよ」

あくまで人には冷たい態度の彼は、今クマに見せた表情とは裏腹につっけんどんに交わした。

一瞬クマから顔を背けていたが、振り返ると既にクマの姿はなかった。

「え？」

女性の方を向くと女性の姿もなかった。

「失敗しましたね」

謎の男の傍らにいた人物が言った。先ほど助けられた女性だ。主婦的な格好ではなく、黒いスーツ姿になっている。

「適当にスコットランドから連れてきたクマだったんだが、まさかあいつと知り合いだったとは知らなかったな……くそ……完璧だと思っただのに」

男の顔に悔しさが表れていた。唇をキュッと噛みしめている。

「あのクマはどうしました？」

「いまはやれ環境保護だの動物愛護だのうるさいから、あの森へ自動送還したよ。——心配か？」

男はニヤリとしながら女を見やった。

「いえ……」

女は顔を伏せた。

「森の空間は干渉不可能なんですか？ 室内と同じように」

男から少し離れたところにいたほかの部下が尋ねた。

「そんなことはない。きつとあの森には強大な魔法がかかっているんだ。おそ

……

らく人間のものじゃない」

「『人間のものじゃない』……？」

部下は首をかしげた。

「魔法を使うのは人間だけじゃないんだ。人間の魔力によく似た力はほかの哺乳動物にもある。そいつが守ってるんだろう。後日調査に行こう」

「はい」

二人の部下が答えた。

「あんな手でアイツがやられるわけがないんですよ」

低い声が聞こえ、コツコツという靴音ともに背の高い人影が見えた。

その言葉に、男は関心を持った。

「ほう、ならもつといい手はあるのかい？」

暗闇の中でその部下は小さく微笑む。

「アイツにはもつと心理的に痛めつけるようなやり方でなくはいけません。あんな奴、あっさり死なせても私たちの心の内がすっきりしないでしょう。何のための組織なんですか？」

男は顎をさすり、にんまりと笑った。

「そうだな。さすがはアルジェントだ。ではその関係のことは君に任せるよ」

「お任せください。もうすでに計画は実行しています。私もわくわくしてるんですよ」

第四章 母なる森

その日、レオナルドは珍しく暇だった。たまたまバイトもないし、課題もレポートもなかったためだ。

こういう日は決まって彼は部屋に閉じこもっていた。閉じこもって、ギターを相手にしていた。

実は彼、ギターを弾くのが趣味なのである。また作曲もして、アルタシアに披露することがあった。かつて森に住んでいたころ、無趣味、いや木に登ることぐらいしか好きなことがなかった彼に、アルタシアがギターをはじめとした音楽を勧めてくれたのだ。もともとアルタシアから借りたCDを聞いて音楽に関心を持っていた彼はすぐにはまった。

最新作を鼻歌を歌いながら奏でていると、彼の脳裏に何かが浮かんだ。彼はギターをケースにしまつて背負うと、アパート出た。

いくつもの電車を乗り継ぎ、ようやくたどり着いた先はスコットランドの田舎だった。

遠くに森が見える。彼はそこへまっしぐらに進んだ。

森に入り、いくつもの斜面を上り下りし、川を渡って、さらに奥へ奥へと進んでいくと、レオナルドに微笑みが浮かんだ。そして、

「ただいま。——母さん」
と声をかけた。言われて振り向いたのは、一頭の白い虎だった。

西洋にはいないはずのその虎は、もうここで十五年近く住んでいる。サファイアのような瞳には、どこか人間らしさがあった。

「おかえりなさい。レオナルド」
虎がしゃべった。優しい女性の声で。

「いつかは戻ってきてくれると信じてたわ。来てくれたのね」
巨大な図体には似合わないほどお淑やかに虎は言った。

「やっとな暇ができたんだ。そしたら母さんのこと思い出して。」
「アルタシア君は？」

「一人で来たかったんだ。それに彼だって暇じゃないだろうし。二、三日ここにいろよ。アパートにいるあの子らも魔法で自由に行き来できるようにしてあるから大丈夫」

「まあ。しばらく居てくれるのね」
「うん」

二人（正確には一人と一頭だが）は、かつて彼とアルタシアがともに勉強し、いろいろ実験をした小屋を訪れた。

「いつもここで頑張ってたわね。受験勉強もここにこもってずっとやってたし」

「懐かしいなあ。当時は苦い思い出ばかりだったけど」

「あら？　なんで苦い思い出ばかりなの？」
「だって定期的にアルタシアがテストするんだ。しかもいつも抜き打ちなんだよ。ちよつと気を抜くとすぐにアルタシアに負けるし。学校行ってないからって甘えなくなかったんだよ」

「負けず嫌いなのね」

「なんだかムキになってたんだよな」
扉は植物が絡まっていたてなかな開かなかった。かなり強引に扉を引っ張りようやく入れた。

中は蜘蛛の巣やネズミの住処になっていて、かつてなにかと実験をしたときに使った器具を置いた棚はボロボロだ。

「僕と彼が住んでたところが今度は生き物たちの住処か」

「程よく日がさして程よく陰るからいろんな生き物たちに好まれてるの」
「ははは、生き物たちのアパートだな」

しばらく二人で森の中を散策した後、レオナルドは持ってきたギターを出して、最近作った二、三曲を演奏した。

その曲は、有名なクラシックやワールド系の音楽をベースにした、美しくもどこか切なげなメロディであった。

白い虎——ハンナは彼の曲を聴いた後、ゆっくりと感想を述べた。
「きれいな歌ね。あなたの心の清らかさが伝わってくるわ。……でもなんだか淋しそうね」

ハンナの表情もどこか淋しげだ。

「何か思い悩むことあるの……?」

急にそんなことを聞かれて、彼は少しびびった。

「え? あ、いや……そんな大したことはないけど」

返答に戸惑って俯いてしまった。

「あれから中毒症状は出てない?」

「ああ、その辺は大丈夫だけど……」

だがしばらくして、彼は思い詰めたように話し始めた。

「……母さん、吸血鬼は魔物なんかじゃないだろ? 体の作りが少し変なだけだろ? だって、こう、ものすごくつらい気持ちを抱かなければあの禁断症状は出ないんだ」

思い余って、彼は涙ぐみそうになった。

「大丈夫よ。この世に生まれた人間なんだから。憎まれるだけの存在として生まれるものなんてひとつもないわ」

彼女の表情は温かかった。

「ホントに?」

彼は不安げに顔をあげ、ハンナの目を見つめた。いつ見ても、美しい目だった。

「現にアルタシア君がいるじゃない。彼を信用してるんでしょ?」

「うん……」

彼は再び視線を落とした。

「どうしたの?」

「いや、なんでもない。でもなんだか、最近、妙な胸騒ぎがするんだ……。こう、虫の知らせっていうのかな」

胸に手を当てて何かを探るしぐさをとった。

「あなたには気の休まる時っていうのはないの? それだから治らないんじゃない?」

今の母の言葉に、彼ははっとして顔を上げた。

「え?」

「私思うのだけど、吸血鬼って病気なんじゃないかと思うの。だって、あなただって生まれた時から吸血鬼だった覚えはないでしょう?」

「まあね……。でも、それ以前の記憶は全くないんだよ。本当の親の名前だってわからない」

「きつとなんかあったのよ。それが原因で吸血鬼になってしまったんだと私は思うの」

「母さん……」

「どうやってなったかはわからないけど、でも、あなたにその苦しみを超える幸せがくれれば、吸血鬼でなくなると思うわ」

この瞬間が、彼にとっては人生最高の瞬間だっただろう。自分がはじめて普通の人間だと思え始めたのだ。

「ああ、それが真実であれば、僕はどれだけ救われるんだろう。もう誰をも恐れる必要がなくなる! 多くの人と仲良くなれる!」

「あなたを七年見守ってきたもの。アルタシア君もそう思ってくれてるわ」

(第五章から第十章まではまだ訂正中です。しばしお待ちくださいませ)

第十一章 見え隠れする何か

あれからレオナルドは、放課後必ずアンナの研究室に現れるようになった。彼女の研究室には、吸血鬼の研究に役立つような資料がたくさんあったからだ。

異常なまでにあふれた本。膨大な量のノート。はじめからあったのかわからないが戸棚に並ぶ奇妙な器具の数々。彼はどれがどう役立つかはわからなかったが、圧倒されて手を出さずにはいられなかった。だがいちいち彼女には聞きたくなかったため資料だけ借りて、あとは自分で作った研究所で見たい。ところがそうすると、質問したりほかの書類が必要になったりしている。ろいろ面倒なことが起こり、結局彼はいやいや彼女のそばにしていることにした。一緒に研究するようになって、彼は彼女に声をかけることを躊躇していた。だが、このところあまり新しい発見がなかったため、しぶしぶ声をかけてみた。

「……あの子、今の段階であんたはどこまでわかってるんだ？」

「知りたい？」

少し抑えたような声で、背を向けたまま彼女は言った。

「本当は……あなたが見てる資料……私知ってることのほんの一部なの……貸さなかったけど……より多くの情報は私がつてるノートに書いてあるわ」

そう言っただけで彼女は、机の引き出しから恐る恐る数冊のノートを取り出した。ノートを持つ手はなぜか小刻みに震えている。

じれったさを感じてきた彼は少々乱暴にノートを受け取り開こうとした。

「待って！」

「なんだ」

彼の指は既にノートの中に差し込まれている。

「開く前に、ひとつわかってほしいの……このノートは、本当に純粹に私が吸血鬼のことを知ろうとして調べて書き込んだことよ。これを見てあなたはきっと私を嫌悪してしまうだろうから言っときたいの」

「そんなの、見ないと分からないだろ」

そしてさっとノートを開いた。

「う……」

数ページ軽く見て彼は顔をしかめ、ノートを閉じて机に置いた。

「全部自分でやったのか……？」

少し睨むように見つめながら尋ねた。

「……最初は『上司』も一緒だった。でも、忙しくなってきた、最近は一人でやってる……」

「ネズミでやるのと同じ心理だったのか？」

彼女は困惑したような表情で少しばかりしどろしどろもどろもどろしていた。

「……ここでその時の光景をまた思い出せっていうの？ もう、ずっと見えないよ……調べても、決定的なことはわからなかった……あなたが見てどう思うのかなってちよつと思っただけから差し出したんだけど……」

——アンナが差し出したノート。それは、吸血鬼のことを医学的に知るために遺体を解剖したことを記したものだ。

ノートには詳細なスケッチが描かれ、レオナルドが引いたのはそのスケッチを目の当たりにしたからだ。

「僕にはこのノートは見れない。僕はネズミで限界だ。人の本物を見た人が描いた生々しい記録なんて見たくない。あんたの口からいろいろ説明してくれ……」

向かいに座っているアンナにノートを突き出し、顔をそらせた。

『百聞は一見にしかず』よ。あなたが見て自分の見解を出して。本当に吸血鬼のこと知りたいなら、こういうこともせざるを得ないでしょ？ あなたと同じファーストネームの有名な歴史人物も遺体の解剖してたのよ。人間のこと知りたくて」

彼女から説明されることはないようである。

すると彼は突然アンナの顔をじつと見た。

「な、なによ？」

戸惑いを見せた彼女に対して彼は真剣な表情で言った。

「このノートを見て考察するためにはあんたを心から信用しなければならな

い。でもそれにはとても長い時間がかかるだろう。だからしばらくは遠慮させよう」

彼女はため息をついて片手を顔に当てた。

「あなたって人は本当に疑り深いわね。そんなんじや共同で何かやるってことも大変でしょうに」

皮肉を加えて彼女は言った。

「僕はアルタシア以外仲間はいらない。ほとんどの人はどうせいつか裏切ると知ってるんだ」

「ならなぜアルタシアは信用できるの？」

半ば呆れた様子もうかがえるその言葉に、彼は少しハッとしたりしたようだったが、でも、すぐに答えた。

「彼は僕のある意味家族でもあるんだ。大学に入る前に、彼はよく僕のもとへ遊びに来て寝泊りすることもあった。それに彼とは約十年の付き合いがあるんだ。喧嘩もよくしてお互いの考えがぶつかり合って、何日も口を利かないなんてこともあった。……今もそんな感じかもしれない。でも、彼と付き合ったこの時間が僕に彼を信じさせることができる原点なんだ。あんたとはまだ関わって一か月もたないじゃないか。人に迫害された過去をもつ僕が、どうやってこの短期間にあんたを同志なり親友なりのレベルで信用できるっていうんだ」

少し熱くなっている彼に、彼女は冷めた表情で対応した。

「共同での活動は親友レベルまでの信頼がなくてもするものなのよ。よっぽどのことがない限り人は嘘をつかない。それに、科学的なことを研究するなら、嘘をついたら研究が先に進まない。矛盾するから。私とあなたは科学的、あるいは医学的な研究をしているの。お互い吸血鬼の真実を探ろうとしているんだから嘘はついてる暇はないの。——だからさっさと読みなさいよ。自分が見たくない理由を人が信用できないせいにしてないで」

レオナルドは腕組みをして足を組んでいた。眉間にしわを寄せ、片側の頬の肉を少し持ち上げて吸血鬼特有の牙を見せた。彼女の押しつけがましい態度にそろそろ嫌気がさしてきたのだ。だがそうしている時間は長くなく、突然何かを思い出したように立ち上がって、上着と荷物を持って研究室を出よ

うとした。それをアンナは逃さなかった。

右腕をつかみ、彼にずいっと顔を近づけた。

「逃げる気？　そうやって今後ここに姿を現さないようにしようっていう魂胆なわけ？」

彼は無言で腕を振り切ろうとしたが、アンナは小柄な割に力が強く、振り切ることは出来なかった。

「この研究は確かに私が依頼したものよ。でもね、あなたが見せた私への態度はちよつと許せない。今のままじゃ研究の『け』の字もできない。うつつうしいだろうけど、あなたにもわかってもらいたい。『アルタシア以外でも真剣になってる人はいる』って。だからここでちゃんとノート見てもらうまで返さないわよ！」

レオナルドは左手でアンナを殴った。強く握った手は離れ、大きな物音を立てて彼女は倒れ込んだ。その途端に彼は研究室を飛び出した。

廃工場を加工した、研究所兼自宅に帰ってくると、彼はカバンの中の物をすべて出し、片づけた。そして、空になったカバンをクローゼットの奥の方にしまい、妙に厳かに扉を閉めた。

「……二度と行くもんか」

とつぶやき、机にうつ伏せになった。

心配して寄ってきた動物たちを、彼はうつとうしそうに手で払いのけた。するとそのうちの一匹のイタチが机から落ちてしまった。

「きゃん」

といういたいけな声がした。彼はハツとしてイタチを抱き上げようとしたが、イタチは怖がって逃げてしまった。

そのとき、彼はさっきアンナを殴ってしまったことを思い出した。

自分は早く彼女のもとから逃げたかったために、暴力を振るってしまったことを、彼は悔やんだ。もっとほかの対応があったかもしれないのと思っただのである。

翌日午後六時ごろ、彼は研究室の前に立っていた。気合を入れるために荒く息を吐くと、背筋を伸ばして扉を開けた。

「……………」

部屋の奥でノートパソコンに向かっているアンナがいた。彼女を見た途端、彼の背筋は少し曲がった。

彼女と一瞬目が合ったが、彼女はすぐにまたパソコンへ視線を戻した。

彼は彼女と視線を合わせないようにしながら目の前に腰かけ、ゆっくり頬杖をついた。そして低く小さな声で言った。

「……昨日は、悪かった」

ちらりと彼女の顔を見ると、左の頬に殴られた跡があった。内出血したためか、紫色ににじんでいる。

「おかげさまで」

アンナが視線を変えずに言った。

「折角の乙女の頬が台無し。最高よね、女に手を上げるなんて。何？ この間私に技かけられたことを根に持ってたの？」

ほかの人が聞いたらただ低くしゃべっただけのように聞こえるだろうが、彼には冷淡に聞こえた。

「そういうわけじゃ……」

言葉を失い、彼はうつむいた。

「にしても、あなたとしたことがよくまた此処に来てくれたじゃない？」

「あのノートを見る気はない」

「じゃなに？ あのノート見ないと先進まないんだけど」

「だからそれは……」

半ば睨み返すように振り向くと、部屋の隅にある写真立てを見つけた。

「ん？」

彼は立ち上がって写真立てに近づいた。

二人とも黒髪にのっぺりした顔つきだった。

「勝手にいじらないで」

写真立てを持ち上げようとした彼に尖った声が響いた。

「な、なんだ？」

彼女は近づいて写真立てを手に取り、大事そうに両手で抱えて席に戻った。

「これは……私の両親の写真。私がまだ生まれる前の、新婚旅行に行った時の写真なんだって。叔母さんがくれたの」

先ほどとは裏腹な優しい声になった。

「そうか……」

彼は、彼女には両親がいないことを思い出した。彼女は今叔父と叔母の家にいて、でも一番親近感を覚えるのは兄だとのこと。しかしその兄は、自分と同じ吸血鬼で、吸血鬼撲滅組織あ。の。組。中に捕らわれている。吸血鬼の真実を知ることが、彼女の兄や自分を含めた多くの吸血鬼たちを救うこととなる。

そんなことを考えているうちに、彼は机に戻って無意識のうちに例のノートに手を差し伸べていた。

「私の両親は、私が小さいときに交通事故で亡くなった……。でもあまりに小さかったから、よく覚えてないの。この写真を見て、ようやく顔を覚えたのよ。お兄さんも同じ感じで、お兄さんを差別する親戚より私と似た待遇のお兄さんの方が好きになるのは当然よね」

彼は彼女の発言に妙なものを感じた。

「ちよっと待て。『お兄さんも同じ感じ』ってどういうことだ？ まさか……」

「うん、同腹の兄じゃないのよ。お兄さんは私が来る前に叔父さんと叔母さんの養子として来てたの。でも、あとでお兄さんが吸血鬼だと分かって、部屋に閉じ込めてみたい……。部屋も改築して、まるで一人部屋のアパートのようにして、部屋の出入りをしなくてもいいようにしたんだって」

彼女は兄の全てを語った。彼女が親戚の家にやってきたとき、親戚は温かい笑顔で「アンナちゃん、よく来たね」と言っただけで家の中を案内してくれた。でも、一つだけ教えてもらわなかった部屋があり、聞いてみたところ親戚か

らは「そこは開かずの間だから入っちゃいけない」と言われ、入ろうとするたびにひどく叱られた。そんなある夜、彼女はこっそり部屋に入った。そこにはベッドに腰掛け、窓の外を見つめる一人の少年がいた。アンナが入ってきたことで彼はひどく驚き、恐れおののいたが、彼女の気さくな態度に安心したのか、すぐに心を開いた。正体を明かしても彼女は恐れず、「私とおんなじだね」と言っただけで微笑んだとか。

「おんなじ」って？」

「私もずっと黙ってたけど、誰にも言えない奇妙な性質があるの。前にあなたと図書館で会ったとき、あなたが見てた本に書いてあった『変幻病』、それが私が持つ性質なの。『病』って書いてあるけど、ホントは何なのかかわかってない。先天的なものなのか、何かが原因でなるものなのか……」

写真立てを戻し、不安げにトーンを落とす声で話した。

「自覚したのはいつなんだ？」

彼女は背を向けたまま、手のささくれを気にしていた。

「物心がついた時からそうだった。嬉しいにつけ悲しいにつけ、感情が高ぶると姿が変わってしまうの。ほかの動物にね。だからあまり感情の起伏が起らないようにしてる。このことを明かせるのはお兄さんとあなただけ」「あなただけ」と言われて、今レオナルドは心のどこかに温かいものを感じた。

——そのうち彼女の兄は家を飛び出してしまい、行方が分からなくなった。しかしつい最近、あの「上司」から、兄が吸血鬼撲滅組織に捕らわれているという情報を得て、現在に至っているという。

と、ここまで話を聞いて、レオナルドは倒れた。

「どうしたの?！」

アンナが心配して駆け寄ると、彼は頭を抱えて起き上った。

「あ、あれ、今何が起きたんだ……?」

目の前にぼんやりとアンナの正面顔が見えた。

「聞きたいのはこっちの方よ。どうしたの急に倒れ込んで」

昨日のように彼女は彼に顔を近づけていた。

「わからない……ただ、今ものすごく嫌な思いがしたんだ……こう……胸が

締め付けられるっていうのか? そんな感じがしたんだ」

そう言いながら、彼の視線は彼女の手首に向けられていた。色白だが何となく自分とは肌の感じが違う。

自分が人の手首をじっと見てしまっていることに気づき、彼は自分の身に起っていることを認識した。

「……まただ。すまない、手首を貸してくれないか?」

視線を感じたのか、彼女は見られていた右の手首をさっと引つ込めた。

「え? 何?」

「……ちよつと、必要になってしまった」

彼は手で口を押えて、少し視線をそらせている。

「ああ……わかった。こんな時に……」

彼女はこころよく（でもないが）手首を上に向けて突き出した。

彼は手首に顔を近づけ、手で口元を隠した。その時一瞬、彼女が顔をしかめた。しばらくその状態が進むと、彼は手と口を離れた。

「あなたの場合その周期はどのくらいでくるの?」

手を解放されたが、彼女は手首を見ることもなくパーカーのポケットに手を突っ込んだ。

「大学生になってからは数えるくらいしかない。けど、この間もアルタシアに噛み付いてしまったし……最近なんか変だ……」

「そうね。無理しない方がいいわ。今日はもう帰って、ゆっくり休んで。元

気になったら、また顔出してくれればいいから」

彼の頭上から優しい声が響いた。

「ああ」

よろけながら立ち上がり、彼が帰ろうとすると……、

「あ、待って」

急ぐように呼び止められた。

「なんだ?」

「連絡先教えて。何かあったとき、お互い連絡取れるように」

アンナは携帯電話を手にして立っている。レオナルドはしばらく考えてい

だが、うなずいた。

「じゃあ赤外線で送ってくれる？」

赤外線通信などほとんど使ったことない彼だが、研究所を自分で作ってしまいうくらいなのでそのことは別に問題ではなかった。

連絡先を交換した後、彼は研究室を後にした。

アンナが一人になって間もなく、携帯電話が鳴った。

「もしもし、どうしたの？ ……お兄さんが？ うそ?! どういうこと？」

彼女は口に手を当ててその場にしゃがみ込んだ。

吸血鬼撲滅組織のボス——ハリー・ライアーはパソコンの画面を見つめていた。

知つての通り、屋外でならレオナルドたちの行動は把握できる。そのため、レオナルドとアルタシアが最近別行動になっていることも知っていた。

ふと彼は、椅子から立ち上がり、建物の最上階へ移動した。そして、まるで金庫のような扉の鍵を開け、中に入った。

そこには、上半身が裸で、傷だらけの青年が横たわっていた。うつ伏せになつており、髪が長く伸びているため顔はわからない。背中にはなぜか白い翼が生えている。

「……まったく、そんなことまでして逃げれるとでも思ってるのか？」

ライアーは蔑むような表情で青年を見降ろし、腹を強く蹴とばした。

青年は小さくうめき声をあげるが、喋らなかつた。

「計画は進んでるんだ。最後に辛い目見るのは君だからな」

そういつて彼は軽く笑い、部屋を出た。

「ところで、あなたの家族はどうしてるの？」

一週間後、顔を出したレオナルドにアンナがさりげなく尋ねた。

「……何を……急に」

「私が話してあなたが話さないのも変でしょう？」

彼は見ていた本を棚に戻してしばらく考えていた。

「前に僕の後をつけてたんだろ？ 話す必要なんてないじゃないか」

彼女に見向きもせずどこかふてくされたように言う彼を見て、彼女は少しどがった声になった。

「知らないわよ。あのときは『上司』に後をつけるよう言われて……」

だが急に弱気な口調になった。

彼はアンナの言う、「上司」の存在が気になった。

「本当に彼を信用してるのか？ やっぱり向こうの手先なんじゃないのか？」

彼女の目つきがきつくなつた。

「そんなことないわ！ 彼が行つてたの。『あの連中は無知なんだ』つて。『奴らに真実を伝えれば、自分たちがしてるのが非人道的なことだつて思い知らされるはずだ』つて！ それに前言つてたでしょ？ 『知れば知るほど吸血鬼を攻撃してはいけない気がする』つて！ それであなたも納得して協力してくれてるんじゃないの？」

アンナの表情は、きつくもありこわばりもしていた。

気のせいかな、急に毛深くなつたように彼には見えた。だが今はそちらのことを言う心理ではない。

「あなたの言ってることが、初めはそうかなつて思わなくてもなくて協力しようかと思つた。こつちも全然つかめてることがなかつたし。でも正直、有力な手掛かりがつかめたらさつさとここを出て行こうかと思つてる。吸血鬼に

関するそこまで詳細なデータや標本が手に入るなんて、『撲滅組織』の手先以外送り手は考えられないじゃないか。……どうやらあなた自身は僕を裏切る気はないようだが、あなたの『上司』やらは信用できない。従うふりをして早いとこ逃げたほうがいいだろう」

「……………」

彼女はその場でうづくまってしまった。

「どうした？」

「ガオーツ」

突然彼女の姿は黒いオオカミの姿となり、レオナルドに飛び掛かった。

「ガールルル」

牙をむき彼を前あしで押さえつけながら威嚇した。

「よせ！ なんだ?! どうしたんだ?!」

すると彼女は我に返ったのか身を引いた。そして元の人間の姿に戻った。

「……ごめんなさい、これが私の奇怪な性質なの。ちよつとこのところいろいろびりびりしてて、過敏になってたのね……。大丈夫？ 怪我とかしてない？」

震える声で言いながら身を丸めた。肩がやや震えていた。

彼はため息をつきながら向かいの椅子に座る。

「僕は怪我をしてもすぐに治ってしまふ。それぐらい知ってるだろ。お互い、変な性質を持つてるから、気を付けないといけないな」

「ええ……——『上司』の件だけど、私は彼を信じるわ。あなたが信用しなくて、ただ情報や手掛かりを得るために協力しても、別にいい。

吸血鬼本人と研究できること自体が、貴重だから……」

彼女は両手を膝におろして、軽く顔を上げた。

「……ほかの吸血鬼たちの情報は、どうなってる？」

彼女は首を振る。

「わからない。だから彼にあなたの跡をつけるよう言われたのよ」

それを聞いて、彼の表情が変わった。

「なら僕の情報が有力かもしれないってことか……。じゃあひとつ教えてくれ。僕には吸血鬼になる前の記憶がないんだ。それはどうしてなのかわかるか？」

「え……そうなの？」

アンナは拍子抜けした。

「じゃあ、あなたはどこで生まれ育ったかわからないってこと？」

「ああ。気が付いたら僕は森で約十年暮らしてて、人間じゃない『母さん』のもとで育ってた。僕が今二十一歳だとわかるのは、母さんが僕の歯を見て

年齢を推測してくれたもので……本当は何歳なのかもよくわからない。ひよつとしたらもつと年が上だろうし、あるいは下かもしれない」

彼女はますます訳が分からない様子だった。

『人間じゃない』……？ それってどういうこと？」

「最初は普通にトランス型の女の子の人だと思ってたんだ。でも母さんが、『自分人間じゃない』っていうんだ。どうもトランス型とは違うらしい。人の姿でいるより獣の姿でいることが多くて……」

と言いつつも、彼はハンナの正体が気になった。もし本当に人間でなくて虎なのだとしたら、なぜあの森にいるのか。

イギリスに虎はいない。いるとしたら、動物園ぐらいである。だがあの森はそんな所ではない。ではなぜいるのか、彼は妙な胸騒ぎを思えた。

「そして最近森から出てきた感じなの？」

考えながら彼はうなずいた。

「さあ……私は、吸血鬼のあなたに『記憶がない』っていうような特徴があるとは思わなかったわ……記憶がない……吸血鬼になったと自覚したときは、どれくらいときだったの？」

彼はすこしばかり困惑していた。母の事情に付け加え、自分のことも分からないからだ。

「よく覚えてない。ただ、僕が吸血鬼になってからそんな時間がたたないうちに母さんと出会ったから……たぶん十歳くらいかもしれない」

彼女は少し信じられないような表情になった。

「その年で記憶喪失になるとはちよつと考えにくいわね……やっぱり、記憶がなくなる直前に何かあったとしたか思えないわ」

レオナルドは、自分の本当の家族はどうなっているのか考えた。なぜ親の顔も名前も分からないのか、自分はなぜ本当の親と関われないのだろうと。

まさか捨てられた……？

そんな考えが頭をよぎったとき、机で頬杖をついていた彼は突然うつ伏せになった。

「レオナルド？」

彼は顔を上げない。

「どうしたの？ また気を失ったの？」

彼女が彼の肩を強く揺さぶると、ようやく気が付いた。

「……あれ、今何してたっけ？」

「え？ 今あなたの過去を話してたじゃない。そしたら急にうつ伏せになって……何があったのよ！」

彼は記憶にないとも言おうように目をぱちくりさせている。

「……直前に何があったのか覚えてないなあ。でも……ああ、まただよ。あの感じがまた来てしまった」

彼は手で口を覆った。

そのしぐさがある種のサインだと感じたアンナは手を差し出した。

「吸血鬼は感染症を媒介させないとわかってる。だから私がそばにいたらある程度は提供するわ」

「すまない。ホントにすまない。こんなところで君に借りはつくりたくないんだけど……」

「別に気にしないよ。いいから早くやって」

彼はこの間彼女に噛み付いたのは右の手首であることを思い出した。今彼女はまた右腕を差し出している。ほかの部位は噛みにくく抵抗があったため、彼は反対側を差し出してくれるよう頼んだ。

「同じ場所を何度も噛むとそのうち傷跡が残るかもしれない。だから反対側にしてほしいんだ」

「そんなこと言うくらいなら、私のほっぺに殴った痕つけてほしくなかったんだけど……」

彼女は視線をそらせながら嫌みを吐いた。

「っつー！」

まもなくアンナは顔をしかめた。彼女の知識によると、吸血鬼の牙は特殊で、軽い力でも容易く皮膚を裂くことが出来るのだとか。だがそれを知らないレオナルドは、傷をつけるのに時間がかからないようにするために、いつも強く噛んでしまう。さいわい、彼は脈のあるところと反対側の向きに必ず噛み付くため、命に関わることはないが、それでもかなり痛いらしい。

「ねえ、もつと優しく噛むことはできないの？」

「ん？」

手で口元を隠しながら傷口の血を舐めとり、傷を跡形なく消すと、手を放した。

「あなたの牙は肉食動物型の人とも違って特殊なの。僅かな力でも傷がつけられるんだから強く噛まないで」

だがこの日も、彼女は噛まれた手首を見なかった。何事もなかったかのようには手をおろした。

「へえ、そうなんだ。悪かった」

納得した彼を横目に、アンナの表情は優れない。

「ホントに大丈夫？ 顔色も悪いし……」

確かに今日の彼は青い顔をしている。

「ああ、実はこの一週間母さんのもとに行ってたんだ。アルタシアと一緒にいて。そこでいろいろ聞き出してただけど、なぜか何度もアルタシアに噛み付いてしまった上にもものすごいストレスを感じてた」

机に頬杖をつけて手でこめかみを押さえている。

「それでおまけに何て言ってたかよく覚えてないって始末だった……。夜も寝付けなくて、疲れがたまってるみたいなんだ」

彼の様子を見てアンナは寝床を提供した。

「ちよつと待って、そこにソファがあるから」

彼女が彼に寄り添い、彼は彼女に身を委ねながらソファに横になった。そして彼女は毛布を取り出しそつとかけた。

それから大きくため息をついて彼の顔を見つめた。

「……それにしても、あなたは肝心な時にいつも気を失うみたいね。それじやいざというときとかやばくない？ それでその直後に血を欲しがらる」

彼は横になったままむつとした。しかし……、

「……それでいつも直前の記憶がなくなる……。前もそうだ！ アルタシアが自分の過去とか家族のことを話してくれたんだけど、なんて言ってたかよく覚えてないんだ。そして彼に噛み付いた記憶だけはある。ひよつとして、家族の記憶がないのもその関係じゃ……」

腕を額の上に乗せて考えた。

「じゃあきつと、何かあったのかも……」

彼は何か大きな発見をした気がした。だがまだ引っかかる場所がある。

「……辛い感情を突発的に感じると気を失って記憶もなくなるみたいだ。でも、普通の人は気を失ったりしない。なぜ僕は、こんなことが起こるんだろう？」

「同時に血も欲しがるんだから、きつと特別なわけがあるのよ。——お手柄だわ！ このことを調べていけば何かわかるはずよ！ ありがとうレオナルド！ これでお兄さんも助かるかもしれない！」

アンナは笑顔を見せた。

「ああ。先週のこと、今日のこと、だいぶ説明がつくようだな……はは、君とやってなかったら見当違いな方向へ突き進んでたかもしれない」

苦笑する彼の様子を見て、どこか安心したような様子のアンナだった。

「ふふ、一緒にやってよかった。ゆっくり休んで。今日は私もここに泊まるから」

彼女は背を向けて立ち上がり、大きく伸びをして机に向かった。

第十二章 光と闇（前編）

翌日彼が目覚めると、そこはいつもの寝室ではなかった。

「おそよう。ようやく目覚めたのね」

アンナの研究室である。

「……んあ？」

半ば間拔けな声を出して仰向けになった。

「もう夕方。四時よ」

「え？」

彼にとつてはあり得えないほどの朝寝坊である。ブラインドから差し込む光の感じがどこかいつもと違うと思つたら。

「よく寝てたわ。いびきもかかずにずくっと寝てて、たまに寝返りを打ったけ。私あなたの寝顔見るの楽しかった」

それを聞いて彼は赤面した。

「おい、人の寝てるそこ見るな！」

と、ソファから起き上つた彼だが、彼女は彼の至近距離にいるわけではなく、いつもの席についていた。

「で、気分は良くなった？」

そう言いながら彼女は近寄ってきた。なぜか鼻と目元が赤くなっている。

「アンナ？ 泣いてたのか？」

彼女はハッと少し顔を俯かせた。

「あ、いや『上司』に言つたらすぐ喜んでくれて……」

だがそんなことだけではなさそうな気が彼にはした。

「……あと、今お兄ちゃんが大変なことになってるらしいの……早く真実を

見つけないといけないの……」

すると彼女は手で目元を拭き始めた。

「でも、今あなたが『アンナ』って呼んでくれて嬉しかった。今まで呼んで

もらえなかったから」

「ああ、まあそうだな……」

彼はソファから立ち上がった。

「それで、なぜ吸血鬼は突発的に負の感情を抱くと記憶が失われるのかっていうことを調べるんだよね」

彼女は彼に向き直つてうなずいた。

「そう。それで、あなたがその現象を起こすほどの悲しみを抱いたときって、いつも似たような内容に対してのようない気がしたんだけど」

彼の眉間に軽くしわがよる。

「どんなことだ？」

彼女は少し考えてから答えた。

「そうねえ、なんだかいいつも、家族に関する話題のとき辛がってた気がする。

ほら、アルタシアだっけ？ あなたの友達。彼の話聞いて気絶したときも、彼があなたに家族の話をしてくれた時だったでしょ？それから私が死んだ両

親な話をした時も、あなたが『お母さん』と呼んでる人のことを話した時も」

それを聞きながら、レオナルドは、先日ハンナのもとへ行ったときに、いろいろ聞き出した内容も、これに近かつたようなことを思い出していた。

どうやら彼の場合、家族に関する悲しい話を聞いて、共感したり自分自身のことを考えて嫌な思いをしたりしたとき、気絶して記憶を失い、同時に血も欲していたようである。

そうなると、彼の本当の両親とも、似たような現象が原因で記憶がないのだとすれば、今はどうしているのだろうか。

彼は胸の痛い思いを抱いたが、気絶することはなかった。しかし胸の激しい鼓動を感じた。

「アンナ、僕はちよつと市役所に行つてくる」

彼は立ち上がった。

「ん？ なんで？」

振り向かずには彼は答える。

「家族のことを調べたいんだ。今どうしてるのか、もしどこかにいるなら、連絡を取ってみよう」

「でももう四時過ぎてるし、ここから市役所あまり近くないわよ。明日にし

たら？」

「でも、この胸の高鳴りを抑えきれない……」

そんな彼をなだめるように、アンナは冷静にやさしく答えた。

「気ぜわしい思いして行つて、中途半端に確認してもかえつて不安になるだけでしよう？ どこかにいると信じて、祈つて、今日はやめときましょう」

彼は少々納得いかないようだったが、彼女の言うことも一理あると思ひ、小さくうなずいた。

その夜、吸血鬼撲滅組織の計画推進部長であるジェームズ・アルジェントはボスに呼び出された。

「いつまで何をやってる？ 君の要望で監視役を増やしたというのに、あいつの育ての母親をなぜまださらわないんだ？」

アルジェントの頭のとつぺんに生えた大きなオオヤマネコの耳は後ろを向いている。普通の人の耳とは違い、感情を素直に表してしまう自分の耳にそろそろ嫌気がさしていた。

「お言葉ですが、それはヤツを此処へおびき寄せるための計画ですか？」

「なに？」

ボスのライアーは眉をひそめる。

「彼の母親をさらえば、間違いなく彼はここへ来ます。どんな手段を使つても。あいつに我々の拠点を知られてもいいんですか？」

すると彼は立ち上がつてアルジェントに近づいた。

「なるほど。それもあるね。でも、別に私はそれで構わないと思つてる。どうせ最後にあいつを殺すんだ。吸血鬼たちは皆ここで死ぬものなんだ。悪霊

が宿る穢れた生物はこの聖なる地で永い眠りにつくのが一番いいんだ。それに君は知らないだろう？ あの母親の過去を。私が君にさらうよう頼んだのは、あの吸血鬼は穢れた猛獣に育てられたために、ほかの吸血鬼よりももっと穢れてるからなんだ。おまけにあの男は最近妙な行動をとつているようにだね、早いとこ始末したいんだよ。だから早くやつてほしい。そうすればじきに彼もやつてくるから」

「了解しました……」

アルジェントは軽くうなだれたまま承諾した。

「ところで、今日呼び出したのはこれだけじゃないんだよ」

「え？」

はつと顔を上げた彼の顔を、まるで覗くようにライアーは見つめた。

「君、最近あれと関わってないか？ せっかく金庫みたいな部屋に閉じ込めてるつていうのに、こここのところ出入りしてるみたいなんだよ。しかも君

といるところをこの間見てしまつてね」

「……なんの、こと……ですか？」

ライアーは不意に笑い出した。

「はははは。君といつてるところを見た』と言つたのに、『何のことでしょう？』つて言うなんて、ごまかしてるの丸わかりだよ。大丈夫、君をクビにしたり

ひどい目に遭わせる気はない。教えてほしいんだ。あれと何をしてるのか」

「何をつて……」

彼の耳は片方前方を向いて片方横を向いていた。そしてややのけぞつていく。

「どんなこと話して、どう過ごしているのか、ありのまま話してほしんだよ」

と言いつつもアルジェントにじりじりと寄つていく。

「いえ、話すほどのことでは……」

「話すほどのことがたくさんあるんだよ！」

彼はいきなり机をバン！ とたたいた。

その様子にアルジェントは恐れおののいた。耳が平らに倒れ、短い尻尾も毛が逆立った。

「あれは私の反逆者なんだよ！ 君があれと関わつてることとは私としてとても許しがたいことなんだ！ まさか君、あいつに賛同して私を裏切る目論見でもしてるんじゃないかならうね？」

アルジェントは目を吊り上げた。

「なぜ私のようなことを?! 私も吸血鬼はおぞましい怪物だと存じておりますし、これまでやってきたんじゃないですか! 私はただ、彼からいろいろ聞き出しているだけです! 今後の活動に役立ちそうな情報を得ようと! 私は、ただこの組織のためだけに生きています!」

彼の発言に、ライアーは顎をさすりながら聞いていた。しばらく黙っていると、どこかまだ疑わしそうに言った。

「今の言葉、一生忘れるなよ」

「はい?」

謎の言葉に首をかしげる彼を背に、ライアーは彼の前から去った。

翌日、レオナルドは朝早く起きて市役所に向かった。

家族に関する書類を受け取り、睨み付けるように見た。

だがやがてその表情はこわばった。頬から血の気が引いていく。

「……うそ……そんな……」

彼の母親は彼が生まれてから間もなく亡くなったと書かれていた。そして父親は消息不明、三度にわたって親戚からたらい回しにされ、ついに赤の他人に養子に出されたと続いている。だがその家族も間もなく離婚し、彼はその家の母親の方に引き取られた……。

「大丈夫ですか?」

目の前の事務の人が彼の様子を見て心配した。しかしそんな言葉も耳に入らず、彼は硬直していた。そして案の定、彼は気絶した。大きな物音をたてて倒れ込んだ。周りにいた人が一斉に彼の方を見てざわめいた。

「どうしたんですか? しっかりしてください! 大丈夫ですか?! 誰か救急車を! 誰か!」

気が付くと彼は一面真っ白な部屋で寝かされていた。横にアンナと見慣れ

ぬ白衣の男性がいた。

「また倒れたの? ホントに大丈夫?」

「ただの貧血のようです。しばらく安静にしていれば大丈夫でしょう」
「どうやら医者の方である。」

「……貧血?」

意識が戻っても、まだ気分は優れない。

「先生、ちよっといいですか?」

遠くから看護師と思われる女性の声がして医者は離れた。

「貧血で血を欲しがるとは思えないな」

医者が去ったほうを向きながら彼はつぶやいた。

「どうして?」

「だって、『貧血』は誰でもなるじゃないか。貧血になった人がそのたびにどこから血を供給するか?」

「ああ、そういえばそうね。——あ、そう。私あなたの家族のこと聞いてきちゃった」

アンナが少しいたずらっぽく言った。

「なんだって?」

さっきまで何となく元気がなかったのに、彼は急に目を見開いて振り向いた。

「あなたそういうことはショックで忘れちゃうでしょう? あなたの過去やルーツを見れば何かわかるかもしれないじゃない。プライバシーの侵害だろうけどあなたのためよ。そして吸血鬼たちの未来がかかっている」
やがてアンナは真剣な顔になった。

「……………」

だがこのときとばかりは、賛同の返事は彼にはできなかった。

ピルルルル、ピルルルル……。

彼が病院から出てきて間もなく彼の携帯電話が鳴った。

液晶にアルタシアの名前が表示されている。

「もしもし？」

「あ、レオナルド。大丈夫？ さっきアンナとかいう人から連絡が入って、君が市役所で倒れたって聞いたから心配してたんだ。でも今日は大事な試験があつてちよつと休めなくて……ごめんねいけなくて」

「ああ、僕なら大丈夫だ。君こそ、試験は大丈夫かい？」

「なんとか。少なくとも単位は落とさないとと思う」

レオナルドは電話口で笑ったが、自分は長いこと大学へ行っていないため、今年も留年だろうなあと思っただけ胸が痛かった。

「それで、研究のほうはどうなの？ さっきの人となんとかやってる？」

「ああ、なんとかね。おとといあたり大きな発見があつたんだ。今まで僕一人がやったことじゃ答えは見つからないってことだよ。でも悪いけど、今はそれを話す心理じゃない。それを話すのは、もっと僕が元気な時にしたいんだ。また禁断症状がぶり返すような話だから」

アルタシアはしばらくおいてから答えた。

「そっか。わかった。じゃあまたいつか話して」

「うん。じゃあな」

そう言つて電話を切った。

その日は彼はアンナの研究室には行かず、家でゆっくりすることにした。ところが部屋に戻ってから、自分が冬の衣服をちゃんと出していないことに気づき、彼はクローゼットや衣装棚の整理をすることにした。

棚の下の段の中を片づけていると、少し大きめの紙箱を見つけた。

箱を開けると、黒とも紺ともいえないダーク系の色の衣服がたたまれて入っていた。その生地は革製のようにだが少し違う感じであった。

この少し不思議な服を見て、彼は、二年前に森を離れるときにハンナが渡してくれたことを思い出した。

「いつかあなたの身に何かあつたら、これを着なさい。これはあなたを守つてくれる特別な服だから。いざという時以外は着ないほうがいいわ」

確か渡されたときは少し大きかった。まだ背が伸びる時期だったため、今

丁度良くてはこの先きつかもしれないと彼女が考慮してくれたのだろう。彼はそう思い、試着してみた。

その服を着て初めて、彼はこの服がバトルスーツであることを知った。体に密着したその服はとても動きやすかつたのである。

黒とも紺ともいえないその色は、きつと「闇色」なのだと考えた。この「闇色」という色彩は、敵に最も見つけにくい色だという。

だが、いつかこれを本気で着なければならぬときというのが、そんな遠くの未来ではないような気がしていた。

アンナはインターネットで吸血鬼撲滅組織のことを検索していた。しかし、オフィシャルサイトというようなサイトは見つからず、ある種の都市伝説のように書かれたブログやオカルト系のホームページでしか見られなかった。やはり、吸血鬼が実在すると知っている人は少ないようだ。

そのとき、彼女の携帯電話からメールの受信音が流れた。開くと、あの「上司」からであった。いつもは電話なのにどうしたのだろうと開いてみると、「すまないアンナ。旅立ちのときだ。私はいつもの場所にいられなくなつてしまった。君のお兄さんの状況も把握できなくなる。新たな情報も提供できなくなつてしまうかもしれない。あとは頼むよ」

本文を読んで、彼女はレオナルドが言った「その『上司』は撲滅組織の手先かもしれない」という言葉を思い出した。そこで、ある意味命取りになるかもしれない内容を送った。

「あなたは、吸血鬼撲滅組織と関わってるの？」と。

数日後の夜に、レオナルドは電話でアルタシアに研究の全てを語った。

「そっか。そう聞いてると、吸血鬼つて専ら被害者って感じがするね」

「ありがとう。そう言ってくれると本当に救われる気分だ……でも、僕

は母さんや君と出会うまで、誰にも愛されないまま育ったのかな……？」

「レオナルド……」

前に話した時のように、レオナルドは突然弱気になった。

「市役所で僕の生い立ち調べたんだけど、ショックすぎて気を失ってしまった……それで大体でしか覚えてないんだけど、誰にも大事にされずにいろんな人の所を転々としていたような感じだったらしい……アンナのように、親戚のうちで長いこと大事にされてる様子じゃなかった……ああ、なんだかすごく淋しくてつらい気持ちになってしまった……同時に血も欲しくなってしまう……今日寝れるかな……」

「大丈夫。僕がいるから。今まで愛されなくても、これからは君を大事に思ってくれる人がいるから大丈夫だよ。でも、いいよ此処で泣いても。レオナルド今まで頑張ってきたもん。僕のために特殊な薬もつくってくれたし、そこまで研究進んだんだから」

「ありがとう……ううっ」

アルタシアの携帯電話のスピーカーから鼻をすする音と、低く嘆く声が響いた。彼は優しい表情で小さくうなずいていた。そして……

「吸血鬼って……小さい時から愛情に飢えた人がなるんじゃないのかな？」

「え……？ 今何て言った？」

鼻をすすったり嘆き声をあげたりしていたためよく聞こえなかった。

「うん、君の話を聞いて……僕のただの推測だけど、幼いころから淋しい思いをしたり辛い思いをしたりとか、なんか、誰かに大事にされたことがあまりなくて、愛情に飢えた人が吸血鬼になるような気がするんだ。血を仲立ちとしてその愛に飢えた分を補おうとしている気がする。だから、自分の過去に関する辛い話を聞くと辛すぎてショックで倒れちゃうんじゃないかって……」

それにつられてレオナルドは付け加えた。

「そして相手の傷口を跡形なく消す力も、伝染病を媒介させないのも……」

「うん、血を通じて誰かからの愛情を受け取るためなんだよ、きっと」

「でもどうして相手の体を傷つけなくちゃならないんだ？ これじゃあかえ

って恐れられてしまうよ。事実今日がそうだ」

しかし、なぜかアルタシアはこのことにすぐに答えた。

「血つてさ、体の中を流れてるんじゃないか。だから誰かの血を得ることで、誰かとながらうしてるんじゃないか？」

するとレオナルドがおいおい泣く声が聞こえてきた。しばらくそんな状態が続くと、彼が感嘆した声で叫んだ。

「君に話してよかった！ 君に会えなければそんなことも思いつかなかったかもしれない！ これが本当だったらどれだけいいだろう！ アンナに話して検証してみるよ！ ありがとうアルタシア！」

そんな彼の声を聞いて、アルタシアまで涙をこぼしてしまった。
「よせよ！ 僕まで涙が止まらないじゃないか……！！ ううっ……ったく！」

翌日彼はアンナに昨夜のことを話し、アルタシアが言ってくれた救いの言葉語った。するとアンナもほろりと涙を流した。

「感動的ね。それが真実だといいわね。——でもどうやって確かめたらいいの？ あなたの情報だけじゃなくほかの吸血鬼たちの情報も調べないと……」

「あの『上司』に教えてやれ」

彼が強く言った。

「これを言えば相手ももう裏切る気にならなくなるだろう。関係者だとすればデータもあるはずだ！ 電話してくれ！」

「うん！」

彼女は元気に返事をし、携帯電話を取り出して電話をかけた。彼女が待っている、今度はレオナルドの携帯電話が鳴った。

「もしもし？」

「レオナルド！ 大変だ！ ハンナさんが！ ハンナさんが！」

かなり緊迫した様子で、アルタシアの声は震えていた。

「母さんがどうした？」

「ハンナさんが……さらわれた！」

レオナルドは心臓が止まる思いだった。

「え?! いつ?!」

「今さっき! ハンナさんは人の姿になってただけど、僕が目を離したすきに……………ごめんよ!」

「あの連中なのか?!」

「多分そうだ! あの猫耳野郎の姿が一瞬見えたんだ」

レオナルドは突然電話を切り、何も持たずアンナに何も言わず研究室を飛び出した。

廊下の窓の外を覗き、怪しい行動をする集団がいなかどうか見渡した。

Sカレッジの外にあの連中と思われる集団が何か大きなものを抱えている姿が見えた。

「つち!」

彼は舌打ちをして窓を開けて飛び出した。

まるでアクションゲームの主人公のように、屋根や壁を伝わりながら慎重に、かつ素早く彼は三階から地上へ降りた。

驚く周囲に目もくれず人ごみをかき分け、撲滅組織の連中を見失わないよう必死で追いかけた。

カレッジの門を出ても、今度は行きかう歩行者や自転車、自動車などが彼の行く手を遮る。道は決して広くない。連中はハンナを連れて黒い車に乗り込み、走り出した。

「待て!」

彼は周囲の建物の塀に飛び乗って走った。長年森で暮らして高い所に慣れ、高い視力が培われたまま衰えていなかったのだ。

塀から屋根へ、屋根から屋根へ、まるですばしっこいサルのように彼は高い所を好んで追いかけていた。

追いかけてから三十分、彼は見慣れぬ建物の中にハンナと連中が入っているのを見た。

鉄筋コンクリートで造られた、巨大な要塞ともいうべきずんぐりした建物だった。周りの歴史の面影のある建物と様子は全く違い、浮いていた。

彼は街灯を伝わって屋根から降り、塀の陰から様子を伺った。

塀の周りに人がいないことを確認すると、彼は突進した。その時だった。

バシ—————ン!!

何かを弾くような、高く耳に突き刺さるような音とともにレオナルドは弾き飛ばされた。

「な……………なんだ?」

もう一度飛び込もうとしたがやはり弾かれた。

そのうち機関銃を持ち武装した男が現れ、彼はやむなく引き返した。「どうしてこんなことに……………母さん……………どうか無事でいてくれ……………」

第十三章 光と闇（後編）

「ううつ………（こどこ）？」

ハンナが目覚めると、そこは四方を冷たい鉄骨が囲む小さくて薄暗い部屋だった。

手足が鎖でつながれ、壁に張り付けられ、彼女の体は大の字にされていた。しかし姿はまだ、人間の姿のままだった。

「やっと気づいたね」

前方の暗闇から声が聞こえる。

「誰?!」

彼女の叫ぶような問いかけに、暗闇から一人の男が微笑みながら現れた。

「君に会えると思ってたよ、ハンナ」

「?」

彼女は硬直した。

「なぜ私の名を……?」

彼は声を上げて笑った。

「ははは、やっぱり」

そのとたん、彼女は自分が正直に言ってしまったことを後悔した。

「安心しな、君の愛しき息子はしきに来る」

男は背広の襟元を整え、彼女の背中に接した壁に手をついた。

「私は君たちのことせくんぶ知ってるよ。君の真実も」

余裕の表情で、彼女の顔を覗き込んだ。

「あなたは、誰なの?」

「知りたい?」

「……なによ?」

男は舐めまわすように彼女を見つめている。

「君は確か、強大な魔力で人間化を図ろうとした『特殊動物』だったね」

男は名乗りもせず彼女のことを話した。

この男はもちろん、撲滅組織のボスであるハリー・ライアーである。

「君は今人間の姿となって、私にトランス型であると思わせているようだけど、私にはトランス型と獣が人間に化したものとの見分けがつくんだ」

彼は彼女の体を見つめながら続ける。

「獣が人間化した場合、必ず本来の毛皮の模様が衣類のどこかに記されている。そしていつも必ず同じ格好をしているんだ。君の場合はその真つ白のワンピースだね。わき腹に虎柄が刻まれているよ。それから尻尾がない。ツール型をモデルとしているからね。トランス型にはタイプによるが尻尾がある。でも、君のような虎タイプの場合、もしトランス型なら尻尾があるはずだ。しかし君にはなかった」

だが彼女にはそんなことは耳に入らなかった。

「私をどうするの? そしてあの子をどうするつもりなの? もし手を出したら、私が承知しないわ!」

ライアーは嘔き出した。

『承知しない』って君い、体が縛られてるのにどうやって私に仕返するつもりなんだい? 大丈夫。君に彼の悲しむ顔は見せないから」

「……どういうこと?」

「言ったまんまだよ。これ以上どう答える?」

ハンナは牙をむいた。

「具体的にどうするつもりよ! きちんと答えなさい!」

「いや、君にこれ以上話すことは何もないんだ。とにかく、君は可愛い息子が泣く姿を見ることはないってことだよ」

彼は背中を向けて暗闇に消えた。そして扉が閉まるようなきしむ音が辺りに響いた。

第十四章 救出と復讐

その夜、レオナルドは自分の部屋に戻り、例のバトルスーツを取り出した。これを着る日は縁起の悪い日なんだと思い、母の安否を心配しながら素早く着替えた。

この格好であの建物の中に入れるかどうかは心配だったが、これしか今の彼には思いつかなかった。

そのときチャイムが鳴り、のぞき穴から覗くとアルタシアの顔が見えた。

「アルタシア、どうして？」

「僕も一緒に行く！ 頼む、あの薬をくれ！」

彼はレオナルドの腕をつかんで懇願するような目で見つめた。

「ありがとう！ 今日君にも手伝ってほしい！」

レオナルドは机に置いてあったカプセル状の薬を一錠出し、水とともに渡した。

薬を口にし、水も飲み乾すと、アルタシアの体はみるみる変わっていった。

体の変化で彼は車いすから転げ落ちた。

彼は立派なチーターの姿になった。

「どうだ？ 大丈夫か？」

自分の姿を見て、最初驚きを隠せなかった彼だが、自分の体が思うように動かせると分かかって喜んだ。

「ありがとう！ どうやら言葉もちゃんと話せるみたいだ」

「よかった！ じゃあ行こう！」

レオナルドは靴に装着可能なローラーブレードを、スーツとセットだった靴に取り付け、アルタシアとともに向かった。

「来ましたよ、ものすごいスピードです」

「やはりな。こっちも早く彼らの顔が見たいんだよ、なあ？」

巨大なディスプレイの前に、にやりとするライアー。その後ろで手足を縛られ椅子にくくりつけられている男がいた。

男は全身黒ずくめで黒いフードまでかぶっている。

「……………やめろ……………彼らに手を出すな」

男のかすれた声を聞いてライアーが振り向いた。

「黙ってる！ この失敗作めが！」

彼はものすごい剣幕で男を蹴とばした。

男は椅子ごと倒れ、小さく悲鳴を上げた。

「まったく、どこまでも私に刃向ってくるヤツだ！」

チーターとなって速く走れる足を獲得したアルタシアと、ローラーブレードで加速できるレオナルドは僅か十五分ほどで撲滅組織の拠点にたどり着いた。

「ここからが問題だな……………」

レオナルドは慎重に門に足を近づけた。すると弾かれることもなくすんなりと潜り抜けられた。しかし喜ぶのもつかの間、今度はアルタシアが入れるかどうかである。

アルタシアも何事もなく入ることが出来た。お互いなんともないことを確認すると、建物へと近づいた。

建物は意外と奥にあり、駐車場に止めてある車の陰を這いつくばったり、倉庫の壁に身を寄せたりしながら進んでいった。

だが、これだけで建物にたどり着いたわけではない。今度は目の前にある密林を通らなくてはならないのである。

密林に入って間もなく、レオナルドは徐に懐からやけに銃口が広い拳銃を取り出した。

「レオナルド、それは？」

とアルタシアが聞いて間もなく、

パン！

と何かが爆せるような音がして、後方からギヤアと鈍い悲鳴がした。

「よく犯人を捕らえるときとかに使う、ネットを発射させる装置だよ。でもこれはただのネットを出すわけじゃない」

「いて、いててててて」

捕えられた男はなぜか痛がっている。

「網の外側内側に無数のとげがあるのさ。身を切り裂くほどじゃないが、ほどこも簡単にさせないし捕まった側も簡単に出られない」

「打ち殺すようなことはしないんだ」

この時アルタシアには、レオナルドが優しいような、ひよつとしたら少し

怖い人のような気がしてきた。

「ああ、まあな。急ごう」

彼はあっさりと返事をした。

だが生い茂る植物が彼らの行く手を阻む。

森での生活に慣れているとはいえ、ここまで植物が多い環境は慣れていない。おまけにさつきと違いなんだか蒸し暑い。

「これはどうも、空間ごと熱帯雨林にしているみたいだ。温室みたいに室内みたいなどころは見えなかったし、入口もなくここへ来たんだから」

彼は小さなナイフを鈍代わりに枝打ちしていく。そのときまた後方で気配を感じた。

「アルタシア後ろ！」

と叫びながら彼はネットを放った。

機関銃を向けた大柄な男がかかり、後ろに倒れた。

「なるほど、そういうことか」

アルタシアは何かを悟ったようだ。

「こーやって密林つくって、僕らを進みにくくさせるだけじゃなく、戸惑っている隙を狙って僕らを殺そうとしてるんだよ」

レオナルドは辺りを見渡しながらいやうなずいた。

「狙うやつがいたらこれで仕留める」
とそのとき、彼の懐の横を赤い光が素早くよぎり、彼のネット発射銃は砕けた。

「なに？」

彼の前方に猟銃を構えた男が立っていた。

バン！

銃声とともに彼の右肩を弾がかすった。彼の肩から赤黒い血が滴る。

「うっ……」

彼は肩を抱え込んでしゃがんだ。

「レオナルド！」

アルタシアの叫びに、今度は男は彼に向かって引き金を引いた。

しかしその直前に彼もしゃがんだため、弾は外れて木に当たった。

「くっそ！」

男はもう一度撃とうとしたのか、銃を構えなおす音が聞こえた。しかし何かに襲われたように、大きなものがのしかかる音がして男は悲鳴を上げ、倒れた。

レオナルドは怪我の治癒を早めるために自ら傷口を舐めた。するといつもより少し早く傷が治った。

「アルタシア、君は大丈夫か？」

「うん、僕は平気。早く行かないとまずいな」

「ああ」

そうは言ってもすぐに早く行けるわけではない。彼らは先ほどのように進むしかなかった。しかしなぜかその後敵は現れなかった。

そしてようやく、二人は建物についた。鉄の扉を押しあけると、目の前にずらりと数人の黒覆面の男たちが現れた。

「よく来たね、待ってたよ」

男たちの後ろから低い声がある。男たちは真ん中を空けると、黒ジャンを着た長身の男が現れた。

ふさ毛が特徴のオオヤマネコの耳、そして腰まである長くてまっすぐな金髪を見て、レオナルドはこいつがアルジェントだと分かった。

「お前か！ 母さんをさらって、アルタシアに怪我までさせたのは！」

アルジェントは感心の悪い笑みを見せた。

「そうさ。すべてはボスのためだ。ボスは君を長い間ずっと倒したいと思っていた。だがうまく倒せなくてあまりに憎んでいるから、ぼくがあの人を心

を和ませるように、君の大事な人を怪我させた。本当は彼には死んでもらうつもりだったんだが、運よく彼は生きてみたいだね。後ろの獣は彼なんだろう？」

アルタシアはレオナルドの陰に本能的に隠れた。

「なぜ……それを？」

「わかるさ、この体だもの。ただのトレードマークじゃないんだよ」

レオナルドはアルジェントがニヤニヤしながら話していることにさらなる苛立ちを覚えた。

「倒すなら、なぜ僕を倒さなかった？ こんなことせずに、さっさと僕だけ殺してしまえばよかったものを！」

「レオナルド……」

アルタシアの悲しげな声に、周りの男たちは笑い出した。

「君も知らないはずないだろう。吸血鬼が実在していると知っている人間はあまりに少ない。そんな中で、ぼくらが君を何処かで適当に殺すわけにはいかないんだよ。事実を知らない目撃者はぼくらをただの人殺しとしか思わない。それで『いやいやぼくらが殺したのは吸血鬼であなたたちを守るためなんだすよ』って言ったって、世間を納得させられるのにはとてもない時間がかかる。目の前の吸血鬼が生きてれば血を吸うところ見せられるけど、死んでしまつては証明のしようがない。まだほかにも吸血鬼がいるかもしれないのに、組織を壊されてはもう倒すことは不可能に近くなる。今まで公に知られることなく倒してきたんだよ。伝説や小説のような吸血鬼ハンターみたいにカツコよくやれないのが現実なんだ。——あとついでに教えてやるよ。なぜボスが君をそんなに憎むのか。ここではまだ捕まっていないう吸血鬼を把握することが出来るんだ。ところがここ数年イギリス中どこを見ても君以外の吸血鬼の存在がわからなくなっているんだよ。ボスはひよつとしたら君が何かしたんじゃないかって疑っている。おまけに君はとても邪悪な獣に育てられて、いろいろ洗脳されてるらしいね。だからとんでもない奴だと思ってるんだよ」

アルジェントの最後辺りの言葉の意味がレオナルドには分からなかった。

「何を言ってるんだ？ 僕は自分以外に吸血鬼がいるかどうかはよくわからない。ただ、僕の知り合いの兄が、ここに捕えられているということぐらいしか聞かない。僕は人と接してきた時間がとても短いんだ。それになんだ？ 『邪悪な獣』って？ 母さんは悪い人じゃない！ お前なんか何かわかる！」

アルジェントは厄介そうに眉間にしわを寄せた。だがすぐに黒覆面の男たちに指示した。

「もういい。君と話すことはもうない。やれ。だが殺すなよ。とどめはボスが刺すからな」

男たちは一斉に飛び掛かった。

レオナルドは靴のローラーブレード部分を外し、男たちの攻撃をかわし、次々と倒していった。どこで格闘技を習ったのだろうと思うほど彼は目にもとまらぬ素早さで避け、その隙に殴った。壁に追いつめられると壁を蹴とばして男たちを飛び越え、向きを変えて素早く体制を整えた。

彼は少し息切れしていた。全身が煮えたぎるように熱い。

だがそれは男たちも同じようだった。息切れする声が部屋中に響く。だが男どもはそれで覆面を取るということはしなかった。

「どうした？ もう降参か？」

すると目の前の男が息も絶え絶えに襲ってきた。

レオナルドは男が構えた拳を受け止め動きを止めると、腹を強く蹴って向こう側の壁へ体当たりさせた。

後ろの男たちは恐れて両側へ避けた。だが、格闘に慣れている彼らはそれでも彼を襲った。

しかし格闘に長けていたのはレオナルドもそうであるらしく、真正面から立ち向かう者には殴り、少し離れている者にはとび蹴りし、横で隙を伺う者には回し蹴りした。

途中拳銃を向ける者がいたが、それも見逃さず飛び蹴りして気を失わせ、払い落とした。

その間アルタシアは物陰に隠れていた。自分が彼らに攻撃されたことで自分が下半身不随になってしまったことがトラウマになっていたからだ。だからいくらレオナルド思いの彼でもこのときは足がすくんでしまつて立ち向かえなかった。だがそのことにレオナルドも気づいていないわけではなかった。彼を恐れ、今度はアルタシアを攻撃しようとする者がいると、彼はその男をひつつかみ床に押し倒した。

黒覆面の男どもをすべて倒すと、彼は落ちていた拳銃を拾い上げて、少し離れたアルジェントの額へ銃口を構えた。

「最後はあんただ。覚悟しろ！」

アルジェントは先ほどの得意げな笑みを失い、わなわなと震え、耳が後ろを向き少し倒れていた。そしてレオナルドから背を向けて走りだした。

「待て！ 卑怯者！」

彼は軟弱な敵を追った。入り組んだ建物の中をアルジェントは曲がり角を多く設けて相手の目をくらまそうとした。しかしそれがレオナルドに通用するはずがなく、やはり吸血鬼のためなのか、研ぎ澄まされた五感をアルジェントは欺けなかった。途中つまづきそうになる中彼は必死で走り、とうとう屋外に出てしまった。四方がコンクリートの高い塀で囲まれており、周りにはなぜか瓦礫の残骸が散らばっている。まるで建物の解体跡のようだった。行き場を失い、おろおろする彼の所に、とうとう、レオナルドが追いついた。

「逃げても無駄だ。真剣になったときの僕は違うんだ」

そう言いながら彼はアルジェントの顔にゆっくりと銃口を向けた。

アルジェントは両手を上げ、バツクしながら壁に身を寄せた。

大きな猫耳は完全に倒れ、身震いしている。

体が壁にぶつかると、彼は手を上げたまま崩れるようにその場に座り込んだ。

その動きに沿ってレオナルドの向けた銃口も下がっていく。

彼がじりじりと詰め寄ると、アルジェントはいよいよ怖がり、泣きそうな顔になった。そしてついに、子猫のような声まで上げた。

彼のそんな様子を見て、本当は優しいレオナルドは銃を向けるのをやめた。

「ふっ」

そのとたんにアルジェントが不気味な微笑みを見せ、腰のポケットから素早く拳銃を出して彼の左肩を撃った。

「ああ……ああああ……」

彼は激痛で銃を落とし、撃たれた肩を手で押さえてしゃがみ込んだ。鮮血が溢れだし、手で押さえていてもどんどんその血は流れ出てくる。

彼のその様子をしばし見ていたアルジェント。だがすぐに銃で彼の後方を二か所撃った。そして拳銃を放り出すと、彼の傷口に顔を近づけた。

まるで毒を吸いだすように口を傷口に押し当てた。弾をくわえて取出し、吐き出すと、傷を舐めた。するとみるみる傷口が口を閉じていく。そして周辺の血も舐めて取った。

レオナルドの怪我は、嘘のように回復した。

「お……お前……」

レオナルドはあつげにとられて言葉が出なかった。

アルジェントは彼と視線を合わせないようにし、ゆっくり顔を放すと、猫のように舌なめずりし、立ち上がって走り出した。

「……ま、待て！」

レオナルドはあつげにとられながらも追いかけた。

アルジェントは何もない部屋でしゃがみ込み項垂れていた。

レオナルドが近寄ると彼は鼻をすすっていた。

「おい、おい！ どういうことだこれは！」

レオナルドは彼の肩を乱暴に揺さぶった。

彼はジャンパーの袖で鼻を拭いている。そして鼻をすする音だけ響かせて

何も答えない。

「答える！ お前も吸血鬼なのか？」

「……………」

アルジェントは視線をそらせて黙っていた。

「答えると言ってるだろ！」

痺れを切らしたレオナルドはアルジェントの頬を蹴とばした。

彼は床に仰向けになった。目と鼻が赤くなっている。

だが彼は今度はそんなアルジェントに慈悲をかけなかった。

彼の胸に足を乗せ、今まさに踏み潰そうとしていた。

「卑怯者！ 裏切り者！ そうやって自分だけ生き残るつもりだったのか！」

レオナルドは憎しみと悲しみ、そして淋しさを含めて怒鳴った。

「……………」

さつきまではあんなによく喋っていたのに、今アルジェントはうんともすんとも言わない。

「仲間だったら僕は喜んだ。同じ悩みを共有できる相手がいると分かっただけ嬉しくなるはずだったのに……お前のせいで、僕はそんな仲間になるはずだった相手を憎まなければならなくなったんだぞ！」

レオナルドはそう言いながら涙をこぼした。それは残念な気持ちなのか、

憎しみか、あるいはアルジェントを何処か気の毒に思う気持ちからくるのか……。

「……僕は人殺しはしたくない。でも、お前を放っておくわけにはいかない……アルタシアを殺す気だったんだらう？ だったらお前が死ねばいい。僕は中途半端なヤツがこの世で一番嫌いだ」

だが、アルジェントの胸を押しつけている足はなぜか力が入らない。それと同時になぜか涙が止まらなくなっている。

「やめて!!」

突如甲高い叫び声が聞こえた。部屋にアンナが飛び込んできた。

「アンナ?! なぜここに?」

彼女はアルジェントのそばに寄り、しゃがんだ。

「やめて! ……もういいから…….お兄ちゃんを殺すことはしないで……」

『お兄ちゃん』……? こいつが?!

アンナは小さく頷いた。

「吸血鬼だったのに吸血鬼を苦しめている、この裏切り者が君の兄だったということか?」

彼女はうつむいたままだった。

「こんなことになっていたなんて最近まで知らなかったの。ごめんなさい」

レオナルドは頭を強く殴られたような感じがした。しばらく何も言えず、ぼうつとしてしまった。やっと我に返ると、彼は怒鳴った。

「僕はずっと君を信用していたのに! 僕が君の研究に協力していたのは…….ずっと、こんな軟弱でろくでなしの裏切り者を救うためだったのか?!

「それだけじゃないわ! あなたも含んでたわ!」

アンナは彼が言い終わる前に言いかえした。目を赤くして彼の顔をじっと見つめた。

「うそだ! こいつは、捕えられていたどころか、撲滅組織の連中を連れて自分の仲間を殺し、ボスの顔色をうかがってアルタシアを怪我させたくらいなんだぞ! それを知って、何故僕にあんな嘘をついたんだ!」

「ほくは殺してはいない!」

アルジェントがようやく口を開いた。

「うるさい! 此処に連れてくることは殺すも一緒だらう?!

「今言ったじゃない! 私はお兄ちゃんがこんなことしてるとは知らなかったのよ! 『上司』も今まで『お兄さんは捕まってる』としか言わなくて、最近事実を言ったの! 私も最初は信じられなくて、あなたと同じ気持ちになった。でもあなたに言ったら、せつかく仲良くなれたのに悪いと思って黙ってたの。ただそれだけ」

レオナルドの顔を見つめながら訴えていた彼女だが、やがて再び俯いた。

「…….でも、あなたが私から信用を失ってしまったのならもう仕方ないわ…….お兄ちゃんを救おうとしたのも事実だしね…….」

レオナルドは大きくため息をついた。

「やっぱりそうだ…….人はみんないつか裏切るんだ…….じゃあやっぱりこの間のこともウソってことか…….あゝあ、やっぱり吸血鬼は悪霊か…….」

「…….」

アンナは悲しみに満ちた目でレオナルドを見上げた。その目には涙が光っている。

「レオナルド! レオナルド! ……あ、いた! ……あれ、どうなったんだ?」

アルタシアが現場に駆け付けた。しかし、この状況を見て目が点になった。レオナルドはぐしゃぐしゃになった顔でアルタシアに顔を近づけた。

「…….どうしたの?」

顔をじっと見られ、アルタシアは戸惑った。

「…….いや、いいんだ。どうしたの?」

「ボスの居場所がわかったんだ。案内するよ」

「ありがとう。…….でもそれ本当だよ?」

レオナルドは、ついにアルタシアにまで疑いをかけるようになってしまった。

「え…….? ど、どうしたの?」

アルタシアが一瞬硬直した。

「…….アルジェントは、裏切り者だったんだ」

「え……どういうこと？」
アルタシアの耳が後ろを向いた。

「あいつは本当は吸血鬼だった。そしてアンナはそんなあいつを兄として慕って、僕に共同研究させた。あんな奴を救うために……もう何を信用したらいいのかわからないんだ……悪いけど、ここは自分で探す……一緒に来てくれて悪いけど、もうかまってほしくない」

そういつて彼は一人で階段を駆け上がって行った。アルタシアは、どうしたらいいのかわからず、ただ俯いていた。

「……………アンナ」

アルジェントは震える手でアンナの手に触れた。

「……………」

彼女は何も言わず、目を背けていた。

「今までありがとう……………ごめんなさい……………ううっ」

彼は涙をぼろぼろ零した。彼女の手を大事そうにさすっている。

「そんな言葉出てくるくらいなら、なんでこんなことするの！　なんで彼に謝らないの！」

「うう……………もう謝っても許してもらえないだろうし……………こうなってしまうて謝っても……………」

彼は蚊の鳴くような声で答えた。

「だから謝らないの?!　お兄ちゃんが改心して反省しているならば、その気持ちを素直に気持ちにしなければ！　お兄ちゃんたちとこ、陰で見てたんだけど、お兄ちゃん、自分が生き残りたいためにほかの吸血鬼たちを此処へ連れてきてたの?」

彼は体を起こし、視線を落として話した。

「……………ぼくは……………あるとき、撲滅組織の人に声をかけられたんだ……………ぼくがなかなか職が定まらなくて、仕事探しの雑誌見た時に……………吸血鬼の話持ち出されて……………『どうだ?　怖くなつただろう?　なら一緒にやろう』と言われて……………普通の人が聞いたら承諾しちゃうような感じだったから……………断つたら正体ばれると思って……………」

「雇われたわけね。でもなんで彼らに吸血鬼だとばれなかったの?」

彼はジャンパーの右側をめくった。そこに、金色の丸いバッチが胸に貼られていた。

「マイクさんっていう人が前にぼくを見かけて、これを渡して、それが認識されないようにしてくれたんだ」

「マイクさんって?」

「よくわからない。精神科医師とかいってたけど、あまり自分のこと話してくれなくて、でも吸血鬼に対して陰で理解してくれてる感じなんだ」

アンナはあの「上司」のことを思い出した。まるであの人のようだ。しかし、彼女はまだ兄の事情が気になっていた。

「それじゃあ少し内容を変えろけど、なんで『計画推進部長』にまで昇格したの?　お金がそんなに欲しかったの?」

アルジェントは目に大粒の涙を浮かべて訴えた。

「違うよ!　違うんだ!　ぼくはここに連れてこられた吸血鬼たちに会いに行つて……………逃がしてた」

「え?!」

意外な発言にアンナはぎょっとした。

「ぼくがレオナルドに言った『ほかの吸血鬼たちが把握できない』ようにしたのはぼくなんだ。逃がした吸血鬼たちに、あのバッチをたくさん渡して、ほかの吸血鬼たちにも渡してくれるよう言ったんだ。そしたら、運悪く彼だけ残ってしまった……………。計画推進部長に昇格したのは、立場が上がって指示する側になれば、ある程度撲滅組織の活動を制御できると思ったからなんだ。アルタシアの件だけど、手加減しろ、命は奪うなって指示したんだ。やる振りするだけじゃ部下がボスにコクするかもしれないから……………ボスはものすごく疑り深い性格で、ある程度正直にやらないと殺されそうで怖いんだ。逃げれば必ず探さるだろうし、あのしつこさは他の人見てて知ってたけど並大抵じゃない。おまけにボスはレオナルドに対してはものすごく憎んでいたから、言われた通りのことするしかなくて……………今日も、『弱らせた状態で連れてこい』って言われて……………もうボスも少し疑いかけて……………最後の最後に逃がす予定だった……………それまでは仕方がないと思つてた。でも、これでいいとは思つてない。毎日すぐ後悔してるし、アルタシアの件ではまさかあそこまでひど

くになるとは思わなかった……彼の母親を閉じ込めている部屋の合鍵は持っている。それを使えば救出できそうだよ。……これを……アルタシアに」

彼は懐から出した鍵をアルタシアのもとへ投げた。アルタシアは半信半疑そうに拾った。だがアルジェントの話をまだ聞こうと思っっているのか、拾ったまま動かなかった。

「なら最後に聞くけど……さっきのアレは何？ 屋外で彼を欺いて撃ったこと……」

彼は目をつぶって深くため息をついてから答えた。

「……もうこうなってしまう以上、彼に心を許せない……そういう感覚だったのかな……でも……自分は疑いの対象にされたくないって気持ちもあつたみたいだな……やっぱりぼくは軟弱な裏切り者だ。……アルタシア、君を攻撃する話をボスに持掛けたのはぼくんだけだ。部長となつて、ぼくの方からボスに何か提案しないと疑われると思つて、部下が提案したことを話してしまつたんだ。ここまでひどいことになるとは思つてなかつた……すまない」

アルタシアは啞えていた鍵を少々乱暴に放り出すと、彼の目をじつと見つめながら言つた。

「僕のことを本当に悪かつたと思つたら、今すぐ僕をハンナさんの所へ案内しろ。鍵もあんたが開けるんだ」

「わかつた。ついてきて」

彼の指示にアルジェントは迷うことなく返答した。彼はゆっくり立ち上がり、袖でもう一度顔をぬぐうと、鍵を拾い、付いてくるよう合図した。

エレベーターはボスがよく使うというので使わず、6階まで階段で向かつた。しかしその階段は錆びついていてよく揺れたため、高所恐怖症のアルタシアには心理的にきつかつた。

「ここだ」

「え……」

高くそびえたつ頑丈な鉄の扉が目の前に立ちはだかつていた。

鍵穴は三つあり、三つとも別々の鍵を使わなければ開かないらしい。

「ボスに覚えておけと言われたんだ。自分でも何度も確認した。すぐに開くよ」

と言ひ、アルジェントはせつせと鍵穴に鍵を差し込み廻した。ところが、鍵が差し込まれて廻つた方がいいが、扉が開かない。

焦る気持ちを落ち着かせるように、彼は咳払いした。

「……合わせ方は九通りある。あまり時間はかからないよ」

「あんた、何度も確認したつて言つたじゃないか」

アルタシアが疑うような目でアルジェントを睨んだ。

「……ああ、言つたさ。でも開かないのは事実だ。開くまでやり続けるしかないだろう……」

やや震えた声で彼は答える。

だがどんなに順番を変えても扉は開かなかつた。しかし、何故鍵穴に入つて廻すことだけは出来るのだろう。

「……だめだ、九通りやつてみたが全部開かない……どうということだ？」

「とぼけるな。どうせこれも演技なんだろう?!」

アルタシアが牙をむいた。

「本当はもつと他に手段があるんだ！ それを僕を此処に連れてきてまごつかせて、冷静な判断が出来なくなるようにしてやるだろう」

アルジェントはパニックになつたように首を振つた。

「まさか！ これは本当にぼくにもわからない！ 確かにここでボスにこれを渡されて、確認したときは自動で扉が開いたんだ！ こんなことになるなんて……」

アルタシアは二本足で立つて前あしでアルジェントの胸を押さえつけた。

「だつたらどんな手を使つてもハンナさんを助けるんだ！ それまで僕が許さないからな！」

「わかつてる！ わかつてるよ！」

彼はふたたび泣きそうな顔になりながら答えた。

ところが結局彼はハンナに近づくと手段を得ることは出来なかつた。

「もういい！ 僕が探す！」

アルタシアは失望して駆け出した。

「ボス、第三屋外の監視カメラが二機とも破壊されてます」

監視ルームにいる部下が無線でライアーに報告した。

しかし彼は別に驚いている様子ではなかった。

「放っておけ。それより確認したいことがある。今そっちに行くから、カメラが破壊された直後の別の部屋での映像を準備してくれ」

だが部下はまだどこか戸惑っている様子。

「はあ……それが、M一三三号ルームの部屋のカメラが、また壊されてるのか映らないんです。それでほかの部屋には人影がないんですよ。ただ、チャーラーのような動物が時々映るんですがねえ」

ライアーは無線越しに舌打ちした。

「とにかく何でもいい。直後の映像を何でもいいから用意してくれ。それから、あの猛獣の部屋の管理は怠るなよ」

「承知しました」

レオナルドは必死で母を探していた。息も絶え絶えに、先ほどの鉄製の扉の前にたどり着いた。ドアのつくりや、鍵穴が三つあるとの警備の厳重さから、ここに彼女が閉じ込められているのだと悟った。しかし今の彼には鍵や鍵になりそうな細長いものなどない。

彼は無理を承知で、ドアに体当たりした。当然ドアはびくともしない。打ち付けた背中に激痛が走る。

「つたく、くっそー！」

と思ひ切り鍵穴を蹴とばした。すると鍵穴が火花を散らし、突然サイレンが鳴りだした。

「緊急事態発生！ 緊急事態発生！」

機械的なアナウンスが流れ、けたたましいサイレンの音とともに、辺りの壁

の赤い回転灯が点いた。

しかしこれをセキユリティが弱まったときだと冷静にとらえた彼はドアノブに手をかけた。あっさりと回った。

扉を開け、彼は「母さん！」と叫んだ。

扉は大きな音を立てて閉まった。

向こうに、手足を縛られて体を大の字にされているハンナがいた。まだ人間の姿のままだ。ぐったりしているのか、顔は俯いている。

「母さん？ 母さん？」

彼は様子を伺うように優しく声をかけた。すると彼女ははつと顔を上げた。

「レオナルド？ レオナルドなの？」

まるで彼を認識しきれていないような言い方だった。彼は目に涙を浮かべた。

「母さん！ 僕だよ！ あなたの息子だ！ わかるだろう?!」

彼は涙をこぼして彼女に抱きついた。

「ああ、レオナルド……よかった……幻かと思ったのよ」

「何を言うんだ?! 母さんをほっとくわけないだろう?!」

彼は母の顔をじつと見つめながら叫んだ。

「ありがとう……でも、どうやって来たの？ この部屋はあの男たちの制御下であるはずよ」

「三つあった鍵穴を蹴とばしたら火花が散ったんだ。その途端にサイレンが鳴って、僕はこれは入れるチャンスだと思ったんだ」

だがハンナは顔をこわばらせた。

「それじゃあ……あなたが入ったこともばれてるんじゃない……」

「そうだろうなあ」

天井から、ライアーの声が聞こえた。見上げるとそこにカメラとスピーカーがあった。

「こんなところまで……!」

レオナルドは歯ぎしりした。

「はははは。何を言ってるんだい。世の中何が起こるか分からないからね。用心するに越したことはないじゃないか」

用心するに越したことはないじゃないか

ライアーの笑いは、二人にとって縁起の悪いものしか聞こえない。突如、部屋が大きく揺れた。

「地震?!」

レオナルドは母の体を強く抱きしめた。天井から砂埃が落ち、視界が悪くなった。

大きな機械が動くような、ウイーンという音が四方八方から聞こえた。しかし何が起きているのかは二人にはわからない。

強い風が吹き込んでくる。何かが引きずられるような音がする。

二人はお互い顔を寄せ合って目をつぶっていた。

「おい！目を覚ませ！」

誰かに怒鳴られて二人は目を開けた。だが二人とも気を失っていたわけではない。

「これは……!」

機関銃を構え武装した男たちがぐるりとまわりを囲っていた。レオナルドの背後、つまり、ハンナの目の前に、背広姿の男が立っている。ライアーだ。

余裕があるようにズボンのポケットに手を突っ込んでいる。

一見普通のビジネスマンにしか見えない。容貌も、どこにでもいる地味な優等生のような。

「誰だ?!」

ライアーのことを知らないレオナルドは怒鳴って尋ねた。

「ようこそ。聖なる墓場へ」

ライアーは微笑んだ。

「君と会える日を、一体どれほど私が待ちわびていたか君にはわからないだろう」

「誰だと聞いているだろう!」

レオナルドが牙を向きライアーに飛び掛かろうとした。しかしライアーの脇にいた男がレオナルドの右肩を撃った。

「う……」

彼はしゃがみ込んだ。

「でしゃばった態度は命取りだぞ。君ならわかってることじゃないのか?」

「……………」

彼は痛みを耐えながら目の前のビジネスマン風の敵を睨み付けた。

「仕方がない。君にとっては今日が最後の日だから、私たちのことを教えてあげよう。私の名はハリー・ライアー。吸血鬼撲滅組織のリーダーだ。そして私の周りには私の部下だ。君は見事に私の策略にはまってくれた。

君は此処で愛する仲間とともに永い眠りに着く」

レオナルドは目を見張った。

「なん……だど……?」

彼の傷はもう完治していた。しかしそのことに気づかず、まだ傷の在ったところを押さえている。はらわたが煮えている方に気を取られているからだ。

「おい、彼に見せてやれ」

「了解」

脇で控えていた背広姿の部下にライアーは指示する。その部下がスナップを鳴らすと、レオナルドたちを囲っていると同じ格好の男数人が、手足を縛られたアルジェントとアルタシアを連れて来た。アルタシアは既に元の姿に戻っている。しかし歩けないため、乱暴に引きずられていた。

「アルタシア!」

彼は顔を上げた。だが猿ぐつわをかまされて喋れない。アルジェントにも同じ待遇が施されていた。

レオナルドは駆け寄ろうとしたが、二人を押さえている男たちが二人のこめかみに銃口を構えたため足がすくんだ。

「何故アルタシアまで! 僕が憎いなら僕だけを殺せばいいじゃないか!」

するとライアーは哀れなものを見つめるような表情を大げさに作った。

「ああ、君はなんて慈悲のない子なんだろうねえ。君だけ死んだら、彼らが悲しむだろう。一緒に死んだほうが悲しまなくていいじゃないか」

レオナルドは言葉を失った。ここまで残酷な人間に会うのは初めてだった。

「なぜ……なぜ……なぜあなたはそこまでのことが出来るんだ!」

「一体僕の何がそんなに憎いんだ！」

彼は渾身の力を振り絞って叫んだ。息切れがする。

冷酷な敵は一人拍手した。

「よくぞ聞いてくれた。君にどうしても知っておいてほしかった。これを聞けば君も生きる気がなくなるだろう。君も私の気持ちが変わるはずだ。後ろを見てごらん」

とはいっても、後ろにいるのはハンナだけ。それ以外はライアーの部下だけだ。だが、ハンナの表情はなぜかこぼぼっている。

「君が見つめているその女性、人間じゃないんだよね。強大な魔力で人間化を図ろうとした『特殊動物』というやつだよ。ここ一〇〇年ほど前から世界各地の絶滅危惧種の動物の中でたまに見られるタイプだ。虎もどうも絶滅危惧種らしい。この動物は、二十年前、ここへ連れて来られた時に、周りの人間をすべて喰い殺した」

「……………え？」

「彼女に言わせればただ逃げたかっただけらしい。でも、そのために何も殺さなくたっていいのね。おまけに死体には喰われたような跡も残ってたんだよ」

レオナルドは、目の前の美しい母の恐ろしい過去を聞かされて戸惑った。しかし何か気になる点があった。

「でも……母さんはずっとイギリスに住んでたわけじゃないだろ？ イギリスにいない虎が、なぜいるんだ？」

彼はライアーに向き直った。

「それは……」

「魔法薬の原料を取るためよ」

ハンナが力のない声で言った。

「私は確かに人を殺した。ずっと飲まず食わずで飢えていたから、憎しみで殺した人間を少し食べてしまったのも事実。でも、私は人を殺したのは後にも先にもあの時だけ。殺される直前だったのよ！ 私はシベリアの森の中で生まれた。母は私を変な子であることに気付いて捨ててしまったわ。でも、狩人の夫婦が私を拾ってくれて、私が人語を操れる獣であることを知っても

恐れず、我が子のように愛してくれたの。私には人間のお友達もできて、このまま仲良く暮らせると思ったのに、あるときイギリスから密輸業者が来て、お父さんとお母さんを殺害して私を連れ去った。狭くて暗い檻に閉じ込められて、何も食べさせてくれなくて……憎しみと飢えに耐えていたの。それなのに！ よくもあなたは勝手なことが言えるわね！」

ハンナはライアーを睨んで牙をむいた。

しかしそれでライアーが引き下がることはない。

「どんなバックグラウンドがあるうと、人を殺した経験のある獣に育てられた人間はろくなことがない。それに、たとえ人語が操れるにしても所詮は猛獣だ。猛獣に育てられた吸血鬼を放っておくことは出来ない」

だがライアーの顔からは笑顔が消えている。

「ちよっと待て。なぜ僕が母さんに育てられたと知っているんだ」

レオナルドはずっとそのことが気になっていた。

「どこでそんな情報を手に入れてんだ、答えろ」

するとライアーの表情に再び余裕が表れた。

「ああ。教えてやってもいいだろう。君も分かるように私は吸血鬼をこの世から抹消するのが仕事であり使命でね、此処では吸血鬼が何処にどれだけ存在しているのか把握できることは君も知ってるだろう。そんな中、一人だけ人里離れた生活をしている吸血鬼がいると分かってね、調べた結果その猛獣に育てられたことがわかったんだよ。さらにね、君のことは君が住んでいた森の周辺地域では有名だったよ。『あの森には悪魔がいる』って。君とその虎が同居していることも、噂的ではあるが知られてたんだ。だからそんな地域の恐怖の元凶を私を取り除いてやる必要があると思ったんだ」

「だからと言って、此処までことをなせするんだ！」

説明されても、レオナルドは納得できない。

「言ってるじゃないか。君はそれ故性質が悪いと。だからとびっきりの待遇で葬ってやらないとって思ってるんだよ」

レオナルドはしばらく敵の顔を睨んでいた。だが、あることを思い出すと、

睨んだ表情がやや弱まった。

「あんたは、吸血鬼の真実を知ってるのか？」

「何？」

彼は片方の眉毛を上げた。

「吸血鬼は幼いころの心の傷でなるものだという説が僕たちの間である。アルジェントとかいう此処の部下を兄として慕っている、アンナという女としばらく共同研究していた。まだ確定できることじゃないが、吸血鬼である僕の傾向性として、家族に関する悲劇的な話を聞いたり考えたりすると、ものすごく胸が締め付けられる思いがするんだ。その結果意識がなくなり、気づいた時に血への飢えを感じるという形になってる。親友のアルタシアと出会ってから僕は血を得ることが少なくなつた。だから吸血鬼は何か別の存在と違うのではなくて、僕は心因性の病だと考えてるんだ。あんたはそれを知つて攻撃してるのか？」

レオナルドの理路整然とした説明に、しばらくぐうの音もでなかったか、無言だった宿敵。どうやら、このことは知らないようだ。だとすると、彼の独断と偏見で吸血鬼を攻撃していた可能性が高い。だがやがてライアーはほんの少し余裕のある顔になった。

「なら教えてもらおう。吸血鬼は通常の人間に比べて視覚、聴覚、嗅覚が何倍も鋭くなる。また、どの吸血鬼にも、ツール型、トランス型を問わず、皆特有の湾曲した牙をもつ。そして、免疫力が桁違いなほど上がる。もしこれが心因性の病で起きるとしたら、かえって発達してるところがあるとは思わないかね？」

「……………」

さすがにそこまでは突き止められていなかった。そのとき、レオナルドは、アルタシアが言ってくれた言葉を思い出した。

「……血を通じて心の傷を補おうとしてるんじゃないのか？」

「なんだと？」

「心因性とはいっても、その内容は家族や周囲から愛されなかったという気持ちなんだ。誰かから血を得てそのつらさを補おうとしているのなら、優れた五感や強い免疫力、特殊な牙は周りの人への負担を軽減させるための物じゃないのか？ 高い免疫力は他の人へ感染症が広がるのを防ぎ、鋭い牙は軽い力で効率よく血を得るためであり、治癒能力も、これは自分だけじゃない、

噛み付いた相手の傷を跡形なく消すのも、相手への負担の軽減のためなんだ。僕はそう思う。第一、僕は人の血を吸うのは嫌いだ。誰も傷つけたくない。そういう思いなの！」

彼は考えたことを全て話した。それがすべて真実であるかはわからない。しかし、出来る限り考えられることを話し、吸血鬼の恐怖をぬぐうことを伝えなければ、自分を含めた仲間の命が危ない。

彼は本当は信じていた。この傍若無人な男も、自分の言ったことを確かめようとか、もしかしたらとか思えば、手を引くと思っていた。しかし……。

「ふん」

ライアーは鼻を鳴らした。

「よくもぬけぬけと吸血鬼を正当化できるものだ。血を吸うやつは実はいい奴だとも言っていたのか？ それじゃあ蚊も大事にせにやかんなあ」

周囲が笑いだした。

「そうやって同じように社会に言いふらせばいい。君たちの頭が、どれほど狂ってるのかよくわかるよ。———ほらご覧よ。やつぱり猛獣に育てられた子どもはこうだ。自分を正当化するためなら、どんな理屈でもこねてきやがる」

レオナルドは絶望した。辛すぎて涙も出ない。アルタシアに目を向けると、アルタシアが猿ぐつわを噛まされたまま涙をこぼしている。長くは見つめられなかった。

「言いたいことはそれだけかい？」

ライアーは笑いをかみしめながら言う。

「もうおしまいかな？ 吸血鬼差別撤退演説は終了か？ はははは」

レオナルドは両手を床に付けた。もう力が出ない。こんな連中に笑われるために自分は頑張ってきたのか？ やはり吸血鬼はどうすることもできない魔物なのか？ こんな、敵を前にすればどんなこともできる連中に成敗される存在なのか……？

めまいがした。このまま意識を失ってしまいそうだ。

———助けて！ 助けて！ 僕のこの苦しい気持ちから誰か解放してくれ！！

目の前が真っ白に光った。彼はすさまじい勢いで周囲の男たちを襲っていた。なぜか飛び交う弾がスローモーションになっていった。弾はどれも体には当たらずすり抜けていく。逆に反対側の男たちに当たっていく。弾が当たった男たちは高い声で悲鳴を上げ、ゆっくりと倒れていく。すべてがゆっくりだった。

途中、黒くて大きな狼が見えた。狼は何かをくわえて陰へと姿を消していく。追いかけてしようとしたが、体は周りの男たちと攻撃をかわす方に気を取られ、その場を離れられない。

そのときである。

ズギュン!

鈍い銃声が聞こえた。その直後、少し離れたところでも同じような銃声があった。その後、何かが倒れた――。

「はっ!」

気が付くと、床一面が血で赤く染まっていた。周りには先ほど銃を構えていた男たちが倒れている。皆身体から血を流していた。

「……うそだろ」

彼は近くに倒れていた男の手首に触れた。ひんやりとしている。脈も見当たらない。背筋が凍りついた。

「そんな……母さん!」

彼は母親に近づいた。彼女は元の虎の姿に戻っていた。

だが、全く動かない。額から赤黒い血が流れている。穴が開いていた。

「母さん……?」

そつと体に触れてみた。――冷たい。

「母さん! 母さん!」

彼は金切り声で叫んだ。頬を両手で押さえて揺さぶる。

「母さん!! 目を覚ましてくれ!! 母さん――ん!!」

しかし、いくら叫んでも、美しい虎の目は開かなかった。全身の力が抜けていくのがわかった。彼は、そのまま、崩れ落ちるように、倒れた……………。

第十五章 暁のとき

なんだか周りが騒がしい。一体どうしたというのだろうか。だんだん意識がはつきりしてきた。誰かがすすり泣く声が聞こえる。その声も、だんだん大きくなって聞こえてくる。

「レオナルド？」

誰かに名を呼ばれた。なんだか聞き心地の悪い声だ。

「……誰？」

ゆつくり目を開けると、そこには髪が少し長い男性が彼に覆いかぶさっていた。だが逆光で顔がよく見えない。意識がまだ朦朧としているのもあるが。

「大丈夫か？」

「……此処は？」

「病院だ。アルタシアは無事だよ」

その声から「アルタシア」と出てくるのには違和感があった。

しかし目の前の男性はアルジェントではない。

「ゆつくりお休み。たとえ吸血鬼でも疲れるときは疲れる」

その声が、彼には信じがたいほど温かく聞こえた。

彼はまたすぐに、深い眠りに落ちた。

それからまた目が覚めた。今日は静かだ。今は何時だろう。彼は起き上ろうとしたが体が石のように重い。体全体が麻痺しているのか、思うように動かない。

「目が覚めたか」

またあの声だ。どうも彼には気に入らない声だった。

だが何故いやに感じるのだろうか。

「すまなかった」

突然その人物は謝った。低く、静かな声だった。

「誰だ……？」

レオナルドはほとんど息だけの声で訊いた。

「知らないほうがいい」

男性はゆつくり答えた。なぜか説得力がある。しかし、前も訊いたことだ。今日は引かないつもりだった。

「教えてくれ」

レオナルドは頑張って声を出した。

「そうか……」

男性はカーテンをめくって彼に近づいた。彼の枕元の明かりをつけ、顔を近づけた。

「この顔に、見覚えはないか……？」

「んん？」

男性は長い前髪をかき分けて彼にはつきりと見せた。その顔は――。

「え?!」

宿敵、ハリー・ライアーの顔だった。レオナルドは飛び起きた。全身をわなわなと震わせ、壁側に身を寄せた。

「何で?! 何でお前が此処にいるんだ! 母さんは? 母さんはどうした?!」

牙をむいて威嚇した。

「落ち着いてくれ」

ライアーらしき人物は悲しそうな顔だった。

「お前に『落ち着け』だと? 何を言ってる?! お前のせいで僕はこんな目に遭わされたんだらう?!」

と怒鳴り続けるレオナルドを、ライアーが抱きしめた。

「本当に気の毒だった。ハンナさんも辛かったのに……」

この間は「猛獣」と呼んでいたのに、今は丁寧に呼んでいる。レオナルドにはさっぱりだった。

肩に冷たいものが滴る。

体が震えていた。鼻をすすっている。

「君を守ってやれなくて本当にすまなかった……」

「? ……どういふことだ?」

ますます訳が分からない。

「私は……」——ハリーの写し身だ」

「は……？」

思わず間拔けな返事が出てしまった。

「私は、本体から、『自分が殺されても跡を継げるように』という意味で創り出された。巨大な魔法の鏡を使って」

「……………」

何が何だか全く想像がつかない。

「わからなくてもいい。ただ私は事実を話すのみだ。のちにわかってくれればいい。……でもな、せめて君にわかりやすく言う手としては、アンナの『上司』だったと言えればいいかな」

今の言葉を聞いて、この人物の存在が一気に現実味を帯びた。

「上司」……………？　ってことはまさか……………」

「ああ。君に言わせればライアー一味と一緒ということになるね」

「……………」でも、僕たちに味方してくれてたんだよな」

二人の姿勢は依然として変わらない。

「信じてくれるのか？」

「あなたがそう言ったから」

「ありがとう」

ライアーの写し身、すなわちアンナの「上司」は、彼を一層強く抱きしめ、それから体を離れた。

「無駄に疲れさせてしまった。ゆっくり休んで」

「待って」

向こうを向きかけた「上司」を呼び止めた。

「なんだ？」

「母さんは？」

「今聞いていいのかい？」

彼を案じるように聞いた。

「先延ばしするほうが嫌だ」

レオナルドははっきり言った。

「亡くなった」

それを聞いて、しばらく彼は無言だった。そして、大粒の涙を零した。

「上司」は再び彼に近寄り、傍に腰を下ろした。

「君のお母さんには心からお悔やみ申し上げます。本当に残念だった」

宿敵と同じ顔なのに、目の前の人物はとても慈悲深かった。

「ハンナさんは、君が住んでた森に埋めたよ。皮肉なことだけど、本体が君の住んでるとこ知ってたから、それで……………」

「いいんだ」

レオナルドは割り切った。もう涙をこぼさなかった。鼻をすすって、涙がこぼれないよう、上を向いた。

「でも、教えてくれないか？　なぜあなたは本体に同じじゃなかった？」

その質問に、しばらく「上司」は答えなかった。

「初めは本体の言うことを鵜呑みにしていた。だが、私が精神科医になることを本体から命じられてから、私は変わった。本体の望みとしては、私が吸血鬼のことを精神医学的に説明することで、吸血鬼が医学的にもどれほど狂った存在か証明したかったらしい。しかし、現実には私たちが裏切った。研究するうちに、吸血鬼となるのは、心の傷が原因であると分かってきた。でもそれが体の具体的などの部分に作用し、どうしてある意味体が発達するようになるのか、今でもよくわからない」

レオナルドには、今の話は意外にも聞いていて気分が良くなかった。本体が自分に突っ込んだ内容と一致しているところがあつたからだ。彼は、血なまぐさい記憶が蘇るのを感じ、少々吐き気がした。

「大丈夫か？」

「……………たぶん……………」

彼は体を倒して仰向けになった。

「続きを教えてください」

「本当にいいのかわかるか？」

「知りたいんだ」

レオナルドは真剣なまなざしだった。

「わかった。——君が言ったような『誰にも愛されぬ辛さ』が原因であ

るとはまだ確定できていないし、吸血鬼に肩を持った時もそうだとは思わなかった。ただ、本体が、憎む相手を倒すためなら手段は択ばないという姿勢が、だんだん怖くなってきて、いてもたってもいられなくなつた。だから私は本体に抗議した」

「どうだった？」

「聞き入れてくれなかった。むしろ私を『反逆者』だとか『失敗作』だと罵って監禁した。でもあるとき私は、監禁部屋の天井に制御部分があると知り、自ら魔法をかけて羽を生やし、制御部分を破壊した。それで、今日に至るまでアンナの『上司』としてあり続けたわけだ。でも、空っぽになると本体が私を探し回ってアンナたちの身の上も危なくなるから、定期的に監禁部屋に戻ってただけだね」

レオナルドはこれまでわからなかったことはすべてこの人物が知っている気がした。よつて、今までのことを全部知りたいと思つた。

「アンナとの関係性はどこでできたんだ？ あと、アルジェントは本当は何のつもりだったんだ？ 全部教えてくれ」

「今日はこの辺にしよう。君が全部知りたい気持ちにはわかる。でもとてつもなく長い話だ。また君が元気になったときのほうがいい」

「上司」は立ち上がった。レオナルドはまだ納得していない。

「じゃあ最後にこれだけは教えてほしい。本体はどうなった？ アンナやアルジェントは？」

「上司」は背を向けたままやや抑えた声で答えた。

「本体は、私が撃ち殺した」

「え……？」

彼は硬直した。

「あと、アルジェントとアンナは無事だ。君が撲滅組織へ着いたとき、密林で君を狙う敵から守ったり、猿ぐつわをかまされていたアルジェントとアルタシアを救出したりしたのはアンナだ。彼女には大いに感謝すべきだ」

そう言つて「上司」はカーテンの外へ出た。レオナルドは、無言で横向きになつた。

その翌日、彼は病院を後にした。病院の門のところアルタシアがいた。いつもと変わらぬ様子だった。とはいつても車いすのままであるが……。

「もう大丈夫なのか？」

彼は相変わらず心配そうな顔である。

「君も、大丈夫か？」

「僕は平気。ミス・アンナが助けてくれたから」

レオナルドはアンナのことと、血縁のない兄アルジェントのことを思い出した。

「二人は今どうしてるんだ？」

「さあ、アルジェントと僕と一緒に病院に運ばれた後、僕より先にアルジェントが病院を去つたから、知らないんだ。ミス・アンナも、僕らを救出して元の姿に戻つた後、どこかへ行っちゃつたから」

「そうか……」

彼は顔を上げて遠くを見つめた。そのとき、ふと何かを思い出し、怪訝そうな顔になつた。

「アルタシア……僕は大罪を犯してしまつた」

「ん？ どういうこと？」

彼は泣きそうな顔になつた。

「人を殺してしまつた……！」

目と鼻が赤くなり、彼は袖で目を拭き始めた。

「え？」

アルタシアは目を見張つた。

「僕は、ライアーが僕の言うことを信じなくて侮辱したとき、あまりの辛さで無意識のうちに周りの連中に襲いかかつていた。あまりに必死だったから、どういふ感じで攻撃してたのかはわからない。でも気づいたら、彼らが血まみれになつて倒れてて、冷たくなつてたんだ……」

「……………」

アルタシアもさすがにこのときは言葉を失つた。口をぽかんと開けていた。

「やっぱり自分が怖い。いざとなるとやはり吸血鬼は人殺しになってしまつた。彼はレンガ造りの塀にもたれかかり、手で顔を覆って号泣した。」

「悪い夢であつてほしい。このまま森に帰って母さんが『おかえり』つて言ってくれるといいのに……」

そう言つて駆け出した。

森へ帰るときの駅へ向かい、電車に駆け込んだ。

電車の窓から見える風景を眺め、だんだん人家が少なくなっていくのを見届けた。

電車を乗り継ぎ、昼前に最初の電車に乗つて、最後の電車を降りた時は午後三時を過ぎていた。

太陽がかなり傾いていた。

森へつながる細い獣道をたどり、岩だらけの急な斜面を登つて、住み慣れた故郷へたどり着いた。

そこに着いた途端、これまでの悲劇がすべて現実であると認めざるを得なくなつた。

ハンナがよく横になっていた草には、石碑が立っていた。まるで普通に人間を葬つたかのように、四角い石碑には「HANNA 1982 - 2007」と書かれていた。誰が彼女の生まれた年を知っていたのかはわからないが、彼女が三十五年も生きていたことがわかつた。

石碑の前には茶色い土が盛つてある。此処に愛しの母が眠っているのかと思つと、胸が張り裂けそうになつた。昨日割り切つたつもりが、やはり墓を目にすると思ひがたつた。そして、その上に百合の花が手向けられていた。

「母さん……」

彼は墓の前にひざまずき、大粒の涙をほろほろ零した。滴つた涙が盛られた土を濡らした。

そのとき、強い風が吹いた。木の葉が風に舞い、彼はとつさに顔を覆つた。だがその風はすぐにおさまつた。

「レオナルド……」

温かな声が背後から聞こえた。振り向くとそこには……。

「母さん？」

後ろで、いつものようにハンナが前あしを組んでくつろいでいる。そしていつものような温かいまなざしで彼を見つめていた。

「母さん！ そこにいたのか？ 脅かすなよ、こんな縁起の悪いセツトつくるな！」

彼は涙で頬を濡らしたまま笑つた。

「いいえ、それは現実よ」

彼女は急に悲しげな顔になつた。

「私は撲滅組織の一人に銃殺されたわ。あなたが周りの人と攻撃を交わして隙に」

彼はしどろもどろした。

「なら母さん、なぜ此処にいるんだ？」

彼女はふたたび穏やかな表情になつた。

「今あなたは私の命に触れてるの。命と言つても、それは霊魂のことじゃないわ」

「え？」

「あなたの命と私の命はつながつてるの。命は時と場所を超えてつながることが出来るのよ」

彼にはさっぱり意味が分からない。わからなさすぎて、またあまりにも唐突すぎて、言葉が出ない。そんな彼の様子を見て、彼女は笑つた。

「ふふ、いつかあなたにもわかる日が来るわ。だから私に会えない、なんて考えないで。あなたの心の中では、私は永遠に生き続けるのよ。それだけは忘れないで」

するとまた突風が吹いた。舞つた葉が彼の顔面めがけて襲つてくる。彼はまた顔を覆つた。やがて風がやむと、そこにハンナの姿はなかつた。

彼は胸元に手を当てた。僅かながらではあるが、温かい気がした。

「ありがとう、母さん」

彼は少し、ほつとした。

それでも墓前から離れたくない彼はしばらくその場に座つていた。そこでいろいろ考えていた。彼は心の中の母と対話していた。

そうしている間に、誰かが彼に近づいていた。そのことに気が付くのにあまり時間はかからなかった。

「ん？」

人の気配がする方に顔を向けると、アルジェントが立っていた。黒い背広に、黒いネクタイ。長い髪を後ろで一つに縛り、脇には白いユリが抱えられている。

「……お前……」

レオナルドは上目づかいで彼を睨んだ。とつさにアルジェントの大きな猫耳が後ろを向いた。

「……………」

彼は無言で墓の前に座った。抱えていたユリを手向けようとしたとき、「おい！」とレオナルドは叫んだ。

「母さんの墓に触るな！」

彼は牙をむいてアルジェントを払いのけた。アルジェントは正座して俯いた。

「お前のせいで僕の人生に亀裂が入った。大事な友人が歩けなくなって、母親が命を落とした。そして、僕は仲間を憎むことになった！」

アルジェントは依然として無言である。唇をキュッと噛みしめ、耳が後ろを向いたままだ。

「なんか言ったらどうなんだよ！」

レオナルドは顔を背けて吐き捨てた。

「……………ごめんなさい」

アルジェントは低い声で短く謝った。その口調が、彼を憎んでいるレオナルドからしてみればそっけなく聞こえた。しかし、こいつはそういうやつなんだと考えた彼は、別にこれ以上言うこともなかった。

二人はしばらく無言でその場に正座していた。沈黙を破ったのは、アルジェントだった。

「いつから来たか？」

「お前に関係ない」

レオナルドは突っぱねた。振り向きもしない。だが……。

「お前は何してた？」

目だけ動かしてアルジェントに尋ねた。

「……………」

彼は答えない。

「お前、人に聞いて自分が答えないって何だよ？」

少々荒い言い方になってしまった。

「……墓を建てた」

先ほどのように低く短く答えた。

「なに？」

彼は耳を疑った。

「病院を出てから、マイクさんに君の母さんの住んでたところ訊いて、一緒に行って埋めた。遺体はマイクさんが厳重に保管してくれてたんだ」

「マイクさんって誰だ？」

「定期的にはぼくの面倒を見てくれた人だ。でもいつも布みたいので顔を隠してるんだ。本当は何者だかわからない」

レオナルドははっとして振り向いた。

「それってアンナの『上司』じゃないのか？」

「『上司』……？」

アルジェントはゆっくり顔を上げた。

「お前のことも知らずにライアーたちに捕まってると思ってたアンナは、お前を助けるために吸血鬼のことを研究してた。そのとき彼女を援助したのが、その『上司』なんだよ。本当はライアーの写し身とか何とかで、顔が全く同じなんだ。顔見せたらお前が混同すると思って、見せたくなかったんだろう」

話を聞いて、彼は石碑に目を移した。

「ひとつ教える。お前は彼とどういう関係だったんだ？ 何故撲滅組織に入ったか？」

彼は石碑を見つめたまましばらく無言だった。

「言っても信じないだろう」

小声で言った。

それがふてくされた態度だと感じたレオナルドは、一瞬殴ってやろうかと

思った。だが、母の墓の前で暴力をふるうのはあるまじき態度だと悟り、上げかけた手を引っ込めた。

「お前、本当はどういうつもりだったんだ？ いちいち黙りこくらずに全部話せ！ お前のせいなんだぞ、なにもかも」

「ごめんなさい」

アルジェントが震える声でもう一度謝った。今度ははっきりとした言い方だった。やがて鼻をすする音が聞こえてきた。

「マイクさんはぼくが撲滅組織にいた時支援してくれた人なんだ。ぼくは本当は二、三日に一度は血を必要とする体だった。でも、誰かに噛み付くわけにはいかないから、マイクさんが提供してくれる人工血液でなんとかした」

「人工血液を得ている」と聞いて、レオナルドはそのうらやましきから怒りが生じた。自分はいちいち誰かに噛み付かなくちゃいけないのに、相手はそんなことをしなくても済んでいるからだ。だがそう思ったときである。

「でもね、人工血液は本来の血液とどっか違って、やっぱり満たされないんだ。日に日に飲む量は増えていって大変だった。ぼくの部屋の冷蔵庫は人工血液でいっぱいになってしまったんだ」

「……それで？」

レオナルドは怒りをぐっと抑えた。声が自然と低くなっている。

「人工血液は日本で開発されたもので、輸入品だから高いんだ。撲滅組織にいた時の収入は結構いいほうだったんだけど、それでもちよっと生活費が足らなくなるくらいだったんだ」

「それで黒覆面の男たちに命令するほど昇格したのか？」

彼は牙をむいた。アルジェントはさっと顔を上げて彼に向き直った。

「違うよ！ ぼくが昇格したのはそのためじゃない！ 悪かった。すべては本当は撲滅組織の活動を制御して吸血鬼を守るためだったんだ！」

「よく言うよ。ボスの顔色伺ってたくせに」

レオナルドは気持ち悪いものでも見たかのように顔をしかめて舌を出した。「本当はあつちに演技してたんだ。あそこはどの部屋も監視カメラがあつて、むやみに撃つたりしたら怪しまれる。だから疑われないように言うしかなか

った。最終的にはこつそり君に抜け道を教えるつもりだった」

「言つてりやいいじゃないか。そうやって」

レオナルドは遠くを見つめた。信じられなかった。

「……全部話すよ。ぼくのこと。撲滅組織に入って今日に至るまでのこと。信じなくてもいいから、聞くだけ聞いてくれ。これがぼくにできる君たちへの償いだから」

彼は視線を変えない。目を細めて口を真一文字にした。

アルジェントはこの間アンナに話したように伝えた。求人雑誌を見ていたとき声をかけられたこと、本当は逃げたかったのに怖かったからついつかり入ってしまったこと、そして、捕えられた吸血鬼たちを逃がし、ばれないような特殊なバッチを渡したこと。

「お前が?! 笑っちゃうよな。僕には散々な目に遭わせたくせに」

アルジェントの唯一の被害者であるレオナルドには到底信じられる話ではない。彼のために犠牲にさせられたとしたら、やっぱりアルジェントは裏切り者だ。

「本当にごめんなさい。君の言う通りなんだ。君のことは一生償う。墓を建てたのも、そういうつもりだから」

彼は地面に手をつけて顔を近づけた。

「そういえば僕に許してもらえらるでも？」

レオナルドは横を向いた。

「お前のことだ。時期に気が変わるだろう。もういいよ」

彼は立ち上がった。

「二度と僕の前に現れるな」

振り向かず、きつく言つてやった。アルジェントがどういうつもりだったとしてももううんざりだった。

ハリーの写し身であり、「上司」と呼ばれた男性——マイクは、撲滅組織の本部にある自分の書斎に来ていた。精神医学の本や心理学、生理学のこ

と、そして吸血鬼伝説にまつわる本など、あらゆる本が並んでいた。

彼はレオナルドが考える、「吸血鬼は誰にも愛されぬ苦しみでなってしまう」ことを検証するため、子どもに関する心理学や、親子と精神医学に関する文献を読みあさった。調べると、母乳は母親の血液からできていると書かれており、別の文献では、実の母親から母乳がもらえず、その上長期にわたって愛されなかった経験を持つ子供の中には、それを補おうとする行動をとる子もいると書かれていた。

もし、この行動こそが吸血行動となるのなら、もう一人の吸血鬼、アルジェントの過去はどうなっているのだろう。マイクは調べようと思ったが、本人ではないため調べにくい。彼はアルジェントにメールを送った。

数日後の昼下がり、公園のベンチに腰かけてうなだれているアルジェントのもとに、マイクは現れた。彼は黒い帽子を深々と被り、ぶらつくような足取りでゆっくりアルジェントに近づき、すぐ隣に腰掛けた。声もかけず、彼は無言のまま前方を向いていた。

「……マイクさん？」

少し戸惑ったような口調で彼が尋ねた。

「ああ」

マイクは前方を向いたまま低く答えた。

「早かったな」

「いや……」

アルジェントは口ごもった。

「こんな人前ではあるんだが、君にちゃんと伝えないといけないことがあるんだ」

マイクは帽子のつばをつかんで顔の上半分を完全に覆った。

「なんだ？」

アルジェントが振り向く。

「私はずっと君に顔を見せなかった。それがなぜだか気にならなかったかい？」

「いや、何か見せてはまずい理由があるのかなと思っただけで……」
彼は別に気にしているようでもなかったらしい。

「そうか。まあ確かに、君にも誰にも言えない秘密があるわけだから、明かせない人の気持ちはわかるんだね」

マイクは少し口角を上げた。

「でも、君は私に正体を知られている。だから私も、君に正体を明かさないといけない」

そう言っただけで彼は帽子をさっと取った。長めの茶髪が風になびき、アルジェントにとっては恐ろしい顔が露わになった。

「ひゃっ?!」

妙な悲鳴を上げてアルジェントは飛び上がった。短い尻尾の毛が逆立ち、本能的にのけぞった。だが、マイクが悲しげな顔をしたため、すぐに何か異変に気付いたようだった。

「え……？ え？」

「本当は、君とずっと一緒にいたのは君のボスだった。しかし、私はハリーであってハリーではない。端的に言えば、私は彼のコピーなんだ」

「ふ……双子？」

アルジェントが首と片方の耳をかしげた。

「いや、双子じゃない。私は完全にハリーと同じ存在なんだ。完全に彼と同じ体なんだよ。魔法の鏡で、コピーされたんだ」

だがやはりアルジェントには理解できていないようだった。ぽかんと口を開けてそのまま固まっていた。

「ほら、単細胞生物とか、分裂するだろ？ あれを人間で無理やりやったようなものさ。本体の記憶も知識も、全部私の中にもある」

「でもあなたは、ぼくを守ってくれた！ ぼくのボスとなっていた方は、あんなに疑り深くて、恐ろしくて、油断も隙もない感じだったのに！」

コピーのマイクは大きく頷く。

「ああ、そうさ。私は本体が嫌いになった。本体に命じられて精神科医師になつてから、私は本体の行動に疑いを抱くようになった。本体の家系は、代々吸血鬼ハンターだった。イギリスではほかの国に比べても例を見ないほど吸

血鬼が多くて、吸血鬼がマジでいると信じている人が比較的多かったから、ハンターが必要だとされてきた。本体は幼い頃から吸血鬼狩りの話を聞き、容易く人に心を開くなど常々言われていた。吸血鬼は人から血を得るために、人を誘惑すると信じられていたからな。でも、そういった知識を踏まえたコピーの私だったが、私自身が経験したことじゃないと思って、自分の目で確かめようと思った。ちょうどそのとき、本体から医者になることを命令されたから、機会が出来た。そして今日に至ったんだよ」

アルジェントには全く見当もつかない様子だった。それを見てマイクはハッとした。

「あ！ すまない。君と今から市役所に行くところだったのに、動揺させてしまった。後にすればよかった」

「大丈夫」

アルジェントは目線を少しそらせて答えていた。

「君にとってはさらに衝撃的なことになるかもしれない。行けるか？」

「うん……多分」

彼は少し抵抗したように、時々止まりながら立ち上がった。

やはり先に正体を明かすべきではなかったと、マイクは彼の顔色をうかがいながら歩いてきた。またここで、アルジェントがどれほど本体を恐れていたかもわかってきた。本当はレオナルドを傷つけたくなかったこともマイクは知っている。しかし、少しでも本体の期待に応えない行動をとる部下には本体はすぐに、まるで捕まった犯人に尋問するように問い詰めていたため、吸血鬼本人であるアルジェントからしてみれば命取りになりかねない。だからある程度は実行せねばならず、結局本当の仲間に憎まれることになってしまった。

彼は常々アルジェントを気の毒だと思っている。レオナルドのことも気の毒だとは思って、悪いと思っていることをしなければならぬ苦しみや、してしまった罪悪感や後悔は並大抵ではない。本体の過去をすべて知っている逆立場のマイクにも、吸血鬼たちへの罪悪感のようなものがあるため、アルジェントの気持ちは痛いほどわかった。

市役所に着き、書類が来るまでの間の時間は妙に長かった。この感覚はき

つとアルジェントも一緒だろう。ソファに腰掛けている間、マイクはアルジェントを見つめていた。彼は前方の受付のほうを眺めている。周囲の音を時々気にするように、目立つ猫耳が時々びくびく動く。彼の場合、例え感情を隠しているつもりでも、このどでかい耳のせいである程度はわかってしまう。

マイクは知っている。彼のような大きな獣の耳を持つトランス型は、遠くでも相手と意思疎通できるように進化したものだ。またこういう人たちの気質として相手の気配に敏感になったり、喋らなくても耳でコミュニケーションできるようにしたりすることで、言葉による意思疎通が難しい場所に適応してきた。そのための大きな耳であるはずなのに、この男にとっては、見破られたくない感情までわかってしまう厄介者になってしまった。

「ミスター・アルジェント」

名前を呼ばれて、彼は一瞬ビクツとした。マイクは彼の背中をさすって「大丈夫だ」と小声で言った。

受付で書類を眺めた瞬間、アルジェントは硬直した。またマイクも、絶句した。この間アンナから聞いたレオナルドの過去ととても似通っていたからだ。

アルジェントも、生まれてすぐに親を亡くしていた。また彼の親には親戚がおらず、養子にされたが、厳しい家に引き取られて優しくされず、もう一軒の家に渡されたと言われていた。しかしこのとき既に彼は吸血鬼となってしまうため、かなり早い段階で吸血鬼と化したことがわかる。

やはりレオナルドと同じく、辛い過去が伏せられていたためか、かなりショックを受けたようで、彼は目を見開いて顔をこわばらせていた。

「マイクさん……」

彼はゆっくりマイクの顔を見たが、すぐに気を失ってしまった。崩れる体を彼は必死で支えた。実はこうなることを予測して、一緒に行ったのだ。

「大丈夫ですか？」

受付の若い女性が心配し、周囲の人も驚いてこちらを見たが、マイクは「ただの寝不足です」とごまかし、周りの不安を押し切って彼を抱きかかえ、「ありがとうございます」と丁寧と言くと、そのまま市役所を後にした。

タクシーに乗ってそのままアルジェントのアパートへ向かった。運転手に

も心配されたが、先ほどのように軽くかわし、お金を払ってタクシーを出た。アルジェントの懐から鍵を出し、共同の入り口のドアと彼の部屋のドアの鍵を開けた。

彼の部屋は日本の面積単位で六畳ほど。しかし服や本、小物といったものが散乱していて、足の踏み場の確保が大変だった。

重いアルジェントの体を抱いて、マイクはよろよろしながら、ベッドへ向かう。

ベッドに寝かせ、向かいの椅子に座っていると、やがて彼が目覚めました。

「おかあさん……」

目に涙が光っていた。そしてマイクのほうを向いた。

「あ……マイクさん」

「私への記憶は残ってたようだな」

マイクはほっとした。

「ここは？」

「君の部屋だ」

「どうして？」

「君は市役所で気を失ったんだよ。君は悲しい過去を目の当たりにして、シヨックを受けたんだ」

マイクは彼の顔をじっと見つめる。

「ああ……」

アルジェントは何か思い出したようだ。

「なんだかすごく嫌な思いをしたのだけは覚えてる。何があったんだっけ？」

「思い出さなくていい。全部私が覚えておく。吸血鬼の研究に役立たせてもらいたいんだが、プライバシーを守る条件でどうかな？」

彼はかがんで訊いた。

「研究……アンナは？」

アルジェントは（血縁のない）妹のことを思い出したようだ。

「わからない。私も彼女の行方は知らないんだ。でも、きっと君たち吸血鬼のことを思ってるよ。——で、どうかな？」

アルジェントは下唇を噛みしめて考えていた。

「うん、いいよ。頼む」
安心したような口調になった。

第十六章 事実から真実へ

レオナルドは自分の部屋でぼうつとしていた。何もする気にならない。このまま死んでしまおうかとさえ考えていた。前は母や親友から励まされたが、今はその母を失い、友人にも恐れられてしまったようであるから、もう生きている意味などないと考えた。

吸血鬼の研究はマイクに任せればいような気がしていた。気力が出ない。横になってもどうせ眠れないし、何をやる気もないし、外出などもつてのほかである。

そのとき、彼の携帯電話が鳴った。画面を見ると、見知らぬ番号が出ていた。知っている人だったら無視しようかと思っただが、誰だかわからないので出てみた。

「誰だ？」

「レオナルド？ 今大丈夫？」

抑えているが、高い女の声でした。

「……アンナ？」

「そうよ。あなたに伝えたいことがあって」

「あなたの言うことなんか聞きたくない」

レオナルドは耳をふさぐ。

「……そう。なら、あなたが本当は人を殺してないってことも聞く気はないのね」

感じの悪い態度を取られると、きつく返すのはアンナの性分だ。だが、このことを聞いてレオナルドはハツとした。

「は？ ……どういふことだ？」

「あら、さっきは聞きたくないって言ったくせに」

小悪魔のような口調でアンナが突っ込んだ。

「そんなことはもういい。教えてくれ、どうしてわかるんだ？」

アンナは軽く間を置いた。

「落ち着いて聞いてくれる？ 確かにあのときあなたたちを囲って倒れた人たちは命を落としていたわ。でもね、あれは自業自得よ。あなたがずば抜けた動体視力ですり避けた弾丸が、向かいの人に命中したの。つまり、あなた

が避けたために結果的に彼らは自分たちを撃ちあつたことになるのよ。あなたは、確かに襲いかかろうとしてたようだけど、避けるので精一杯だったようね」

これを聞いて、彼は複雑な気持ちになった。安心すべきか、やはり悔やむべきか、悩んだ。

「あなたがしたことは間違っていないわ。憎む相手に大事なお母さんをさらわれたら助けに行くのは当然だし、自分たちを悪者に仕立てる傍若無人なボスに抗議するのも当然よ。おかしなのはあの石頭たちよ」

アンナはすべてを見ていたようだ。彼女は常に冷静で時に毒舌であることを彼は知っている。その点は間違いない。彼は彼女のこととは今回は嘘ではないと思っただ。

ついでに、兄のことも、ただ黙っていただけで知ってから嘘をついたわけではないことも気づいた。

「……君には本当に頭が上がりないな」

敢えてとても低い声で言った。

「だから安心して。あなたは無駄に罪深く思うことはないのよ」

彼女は柔らかく伝えた。

「ありがとう」

正直、とても嬉しかった。

「今、いつもの研究室の外にいるの。今日初めて『上司』に会ったんだけど、ライアーの写し身だそうだってね。名前も変えてマイクとか名乗ってたけど」

「ああ、そうか。君は彼を知ってはいっても顔は見てなかったんだな」

「あなたとお兄さんの過去を比較してみたんだけど、いろいろ共通点があるのよ」

「兄」と言う言葉が出てきてレオナルドの顔が曇った。

「いきなりその話か？ 何なんだ？」

「悪いわね。あなたとお兄さんは、どちらも幼いころの記憶、時に、吸血鬼として生きる前の記憶がなかった。書類を見た時、お兄さんも倒れたんだって。それから、ふたりとも生まれてすぐに実の親との縁が切れる。そして、預けられた家でいい思いをしていない……。そんなところね。ふたりともと

てもよく似ているから、ほかの吸血鬼たちもそうなんじゃないかって話よ」話を聞いて彼は足を組んだ。

「彼と一緒にされると嬉しくないな」

「あなたにとっては何。お兄さんがあなたにこんなことしなければ、仲良くなつてたのにな……。そうそう、話してたら、『上司』がとても興味深いことを話してくれたわ」

「ん？」

彼は眉をひそめて携帯電話に目を向けた。

「母乳って母親の血液からできるらしいの。それで、実の親から母乳がもらえず、尚且つ関わりがなくて、愛されない苦しみを長年経験した子どもの中には、それを補おうとする行動をとる子がいるんだって」

「それがまさか吸血鬼だってことか？」

彼は一気に胸の高鳴りを覚えた。手が震えてきた。

「そう思いたいけど、まだ確定できないのよ。ほかの吸血鬼たちも確認できれば、協力してもらえれば、決定的な事実がわかるはずなんだけど……」

彼は歯ざしりした。だがそのとき、はっとひらめいた。

「確か、ほかの吸血鬼たちは特殊なバッジを持つてるんだってな。黄金色の」

「知ってるの？」

「君の兄さんが言った」

眉をひそめたまま告げた。アンナのことは信頼を取り戻しそうだが、その兄にはやはり心を許せない。しかし、彼にとってこの対照的な二人が兄妹関係であるというのが、なんとも複雑な気持ちにさせた。

「……そのバッジは、上着の下とか、割と目立たないところにつけられているらしいから、もし、それを確認できれば認識されなかった吸血鬼かもしれないんだ」

「じゃあ、それを頼りに探すってわけね」

レオナルドは携帯電話越しに大きく頷いた。

「ああ。それに、僕しか持っていない人がいなかったとすれば、ほかの吸血鬼たちは自分たちで何かコミュニケーションでも作ってるのかもしれない。そう思わないか？」

「うん。それは大いに言える話だわ。さっそく探しましょう」すると彼は首を振った。

「探すのは、僕がやる。君じゃ仲間だと思われなくて誤解されるだろう」

「……あ、そうね。決定的な共通点はその牙だもんね」

「そう。——あそうだ、君は今日までどうしてたんだ？」

アンナの行方がここ最近分からなかったたので彼は気になった。

彼女はすぐには答えなかった。

「……ちよつとね、いろいろあったの。でも、その後はさっき言ったみたいにまた研究の続きしてるの」

「随分とドライなんだな。僕なんか君の電話が来るまで何もする気にならなかったのに」

彼は妙に口角が上がってしまった。

そういうわけで、彼は吸血鬼捜索に乗り出した。とはいっても、特別なところに行くわけではなかった。普通にスーパーに行ったり、ホームセンターに足を運んでみたり、デパートを覗いてみたりと、ありふれた場所を探していた。吸血鬼である彼自身が特にほかの人と違うところに行くわけではないので、ほかの吸血鬼もそうであると考えていた。

そんなあるとき、——探し始めてから三週間後、彼がショッピングモールのトイレで手を洗っているとき、横に同世代と思われる男性が現れた。彼は茶色い革のジャケットにデニムのズボン姿。ごく普通の人だ。しかし、レオナルドは何か感じていた。

鏡に映った男性が大きく伸びをすると、ジャケットの下から何か光るものが見えた。優れた動体視力を持つレオナルドが見ると、それはなんと金色の丸い缶バッジ。おまけにその男性は伸びをした後、鏡に顔を近づけて自分の歯を見ていた。まるで虫歯を気にしているようだった。そのとき鏡に映った犬歯が、やけに長く、湾曲していた。——まるで吸血鬼の牙のようだった。

レオナルドが鏡越しにじっと見ていたことに気づいたのか、男性はさっと牙を引っ込めてトイレを出て行った。レオナルドは無言で男性の跡について行った。

店内に戻って間もなく、彼は男性の腕をつかんだ。

「な、なんだあんたは！」

男性は驚いて手を振りほどこうとする。

「話がある」

レオナルドも少し焦った。握った手にも力が入ってしまった。

「え？ 何？ オレあんたのこと知らないよ」

「僕も君のことは知らない。だから教えてほしいんだ」

「何なんだよ?!」

本当に吸血鬼だからなのか、男性はひどく怖がっていた。

「単刀直入に聞く。君は吸血鬼か？」

男性は恐怖のあまり彼を反対側の手で殴った。彼は床に倒れた。

「てめえ、何を言いやがるんだ!! オレに喧嘩を売るつもりか？」

その過剰な反応が凶星であると思ったレオナルドは殴られた頬をさすりながら立ち上がった。

「僕も吸血鬼だと言えば、許してくれるか？」

そう言っ、彼は牙を見せた。

「トイレで見かけて、牙の形がそっくりだったんだ」

男性は目を見開いて固まった。

「……外部にも、いたのか……」

男性がポロリと言葉をこぼした。

「……『外部』？」

「知らないのか？」

「何のことだか……」

お互い、きよとんと動かなくなっている。

「SPV、つまり吸血鬼援護協会 (Society for the Protection of Vampires) だよ。吸血鬼たる者ならだれでも知ってるはずだ。いや、知らないから入っ

てないんだな」

レオナルドの予想は当たっていたようだ。

「会員は何名だ？」

「三五人。イギリス中の吸血鬼たちが集まっている。みな吸血鬼撲滅組織からの脅威に怯えてるんだ。悪いことは言わん。早くSPVに入れ。バッチもやる」

「大丈夫だ」

「どうやら撲滅組織が倒されたことは知らないらしい。」

「撲滅組織はもう滅んだ。僕が打ちのめした」

「え？」

男性は差し出した手を止めた。

「冗談だろ……？」

「嘘じゃない。僕と僕の仲間が協力して倒した。ボスも死んだよ」

「あなたの仲間も吸血鬼なのか？」

「いや、約一名除いてみんな普通の人間だ」

男性にはますます理解できないらしい。前かがみになった頭を振り上げながら首を振った。

「ちょ……ちよっと待てよ、あなたには人間の仲間がいるってことか？」

「君だって人間だろう？」

レオナルドは男性を指さしながら言った。

「バカ言えよ！ 吸血鬼が人間であるもんか！」

二人はモールの屋上駐車場に向かって歩いていった。

「なぜそう言い切れるんだ？」

「だって……人間の血を吸う種族が、同じ仲間であるわけないだろう？」

それがただの認識の違いか、あるいは血を吸うことに対する感覚の違いからくるのかレオナルドは気になった。

「じゃあひとつ訊くよ。君は好きで血を吸ってるのか？」

男性があきれ顔をした。

「おいおい、あなたそれでも同じ吸血鬼かよ？ 好きなわけないだろ？ 俗世間の伝説じゃあ好きだとされてるけど、オレたちSPVの吸血鬼はみんな

嫌だよ。ただ、必要としてる体なんだから、やっぱり違うのかなって」

それを聞いて、レオナルドは胸を撫でおろした。もし「好き」だと答えたら、自分たちの見解が違ってしまうからだ。それに、やはり吸血鬼がおっかないものだと思わざるを得なくなってしまうからだ。

駐車場に出て、二人は柵にもたれかかった。曇った空の向こうがやや紫がかっている。

「僕も最初は君と同じ考えだった。でも、同じように喜んだり悲しんだり、また誰かが傷つくのを見たり聞いたりして、自分も辛くなったりするのは、吸血鬼でもほかの人でも同じだと気付いたんだ。それに、血を吸いたくないのは、根本には誰も傷つけないからなんだよ」

男性はレオナルドのほうを顔だけ向けていた。

「でもさ、不老不死ではないにしても、あのとんだ免疫力は何だよ？それに、ほかの人間に比べて、オレたちは五感が研ぎ澄まされてるそうじゃないか。あれなんだよ？」

レオナルドは目の前の自動車を見つめていた。

「僕もよくわからない。でも、あれは血を吸う時にほかの人への負担を軽減させるものなんじゃないかって考えてる」

すると、男性は笑った。空を見上げて、なんだかどこか嬉しそうでもあった。

「あなた、変わったヤツだな。まるで吸血鬼を研究してるみたいな……」

「してるんだよ」

レオナルドははつきりと言った。

「その手がかりを知る上で君にも手伝ってほしい。そのSPVとかにいる仲間にも手伝ってほしいんだ」

男性は笑顔のまま振り向いた。

「吸血鬼が吸血鬼を研究するとはねえ。ふふ、面白い。あんた気に入った。さつきは殴って悪かったな」

「いや、唐突で君も驚いただろう。こっちもごめん」

「オレ、ステイヴンっていうんだ。あんたは？」

「レオナルドだ」

「レオナルドか、よろしくな」

「ああ」

二人は握手した。

ステイヴンはレオナルドをどあるバーへ案内した。そこはSPVの集合場所であるという。今日は決まった集まりはないが、SPVの創設者、つまりボスが現れた時、そこそこの人数が集まっていれば皆でボスの家へ行くのだという。どういうわけか勝手にボスの家に行つてはならないらしい。

向かったのは夜の九時。さつきまで一人でファミレスで夕飯を取っていて、もう今日は解散かと思つたらステイヴンが言ったのだ。

しかも、案内されたバーの外観や雰囲気を見て一瞬レオナルドは騙されたのではないかと思つた。

悪趣味な赤いランプが入口の前にぶら下がり、店の壁をツタの葉や蔓が壁にまとわりつき、古びた四角い窓の向こうから妖しい橙の灯りが揺らめいている。扉に「ようこそ、甘美と誘惑の世界へ」といかにも危険な雰囲気を漂わせることが赤い字で書かれていた。

ステイヴンは入口のすぐ前に立っていたが、レオナルドは足がすくんで進めなかつた。それどころか、ひどく顔をしかめてステイヴンを見つめた。

「……どういふことだ一体？」

「何が？」

「SPVのみんなは血を吸うのは嫌いだと言っただろ？」

「ああ」

「じゃあこのバーのこの空気は何だ？ いかにも悪趣味な連中が集まりそうな場所じゃないか」

ステイヴンにはレオナルドの言いたいことが全く理解できていない様子。目をぱちくりさせ、黙っている。レオナルドはイライラしてきた。

「とにかく入れよ。寒いし」

「……………」

レオナルドは無言で下を向いていた。ステイヴンがドアを開けると、上に取り付けられた小さなベルがチャリと鳴った。

中に入ると、それぞれのテーブルの一つずつロウソクの明かりが置かれていた。天井から淡い赤い光が放たれているが、薄暗い。

中には三〇人ほどの男女が座っていた。普通の格好の人もいればゴシックかヘビメタを思わせる格好をした人もいる。

普通に会話している人は少なく、誰かが誰かに絡みついたりまとわりついたり、中には妙に大きな笑い声をあげる者もいた。壁には伝説でよく聞く吸血鬼、たとえばドラキュラをはじめとした様々な吸血鬼が牙をむき、唇から血を滴らせている絵が飾られていた。流れているBGMもうめき声のような声が響いており不気味で、クラシックやワールド系の音楽を愛するレオナルドにとっては聞き心地の良い曲ではない。彼はますます騙されている気がしていた。

「こいつらは吸血鬼もどきだ。オレたちとは違う」

ステイヴンが振り向かずに言う。

「オレたちもどきどもの空気に紛れるんだ。そうすることで吸血鬼的な会話をしても怪しまれないんだ。ほかでは集まりにくいし、自分たちがほかの人間とは違うと思ってるのが周囲にばれそうになっても、こういう場所ならそういう演出だと思われるだけさ」

「もどきって何だ？」

「吸血鬼でもないのに、自分たちを吸血鬼だと思い込んでる奴らだ。そういう連中に限って、ニンニクが嫌いだったり、妙に太陽光を避けたり、十字架を恐れたりするんだ。——まあ、ある種の悪魔崇拜みたいのかな？ 逆さ十字架を掲げるような……」

「ふうん。彼らは血を吸うのか？」

「自分たちで飲むことはないが、互いを傷つけて血を取るやつはいる。取ってどうするのかは知らないが、妙な儀式や商売とかに使っくんじゃないのか？」

「醜いな。そいつらこそ、ある意味本当の『吸血鬼』だな」

レオナルドは舌を出しそうになった。

ステイヴンはカウンターの席に座った。レオナルドは彼の隣に座った。ステイヴンが目の前のバーテンダーを呼び、「いつもの」と短く伝えた。そのバーテンダーも、男のくせに目に黒いアイシャドウを入れて同類であることを示している。

「おや、その坊やは新入りかい？ ステイヴン」

「ああ、レオナルドっていうんだ。マスター、彼にも同じのを」

レオナルドからしてみればこういう危険な連中に本名は知られたくなかった。しかしステイヴンが彼の普段使う偽名を知っているはずがないし、レオナルドもこんなことが起こるとは想定外だったから仕方なかった。

そんなことを考えている間に、彼の前に、赤い液体の入ったカクテルグラスが置かれた。

「当店自慢のカクテル、『ブラッドレッド』でございます」

「レオナルド、安心しな。これは血じゃないぞ」

するとバーテンダーが笑い出した。

「ははは、何？ この子は血が苦手なのかい？」

「ちよっとまずい過去があったみたいでな、ここんとこ血の匂いすら受け付けなくなったらしい」

レオナルドはとっさに彼を睨んだ。

「まあ一口飲んでご覧よ。クセになるぞ」

酒類など全く飲んだことのない彼である。少し戸惑ったが、いやらしいバーテンダーが彼をじっと見つめるのでカクテルを軽く舌に忍ばせた。

甘くて、ほのかにラズベリーの味がした。それとともになんだかい気分になった。さっきまでの重い気持ちがあつと軽くなった。ちよっと嬉しいくらいに。彼は一気に飲み干してしまった。不意に軽く笑いだした。

「ふふふ、悪くないな、これ」

「……レオナルド？ 顔赤いぞ」

「え？ 何？」彼はもはや冷静な判断力を失っている。

ステイヴンは焦ったように彼を壁側のソファに連れて行った。

「あんた、意外と酒に弱いのか？ 此処でへべれけになったら危ないぞ」

「確かに……でも旨かったぞ、あの酒。また飲んでみたい」

彼は正直本当に気持ちよかった。こんなに楽しくて何もかも忘れられる気持ちになれるなんて、夢見心地という言葉では足りないほどだった。

「オレの部屋に來い。今日は集まるのなしだ」

「え……残念だなあ」

すっかり酔っぱらっていた。そしてそのまま、深い眠りについた。

「ぐづつ……ううう」

強烈な光を浴びて彼は目覚めた。頭が割れそうだった。

「目覚めたか？」

その声はステイヴンだった。しかし眩しさと激しい頭痛で目を開け続けることが出来ない。

「二日酔いか？」

「ふつか……よい？」

彼の声は最後のほうでほとんど息だけになっていた。

「……どこなんだ？」

「オレの部屋だよ。まったく、バーで仲間に会うところが酔っちなまっつてどうするんだよ？」

ステイヴンの大きなため息が聞こえる。

「ぬるま湯にゆっくり浸かると治る。今オレが準備してやるから、そしたらしっかりするんだぞ」

彼がそう言って向こうへ行く音が響いた。

「うん……悪い」

彼は情けなく思っていた。初対面の人物にいきなり世話を焼かせてしまったからだ。申し訳なきより、そっちの気持ちの方が強かったため、彼は布団で顔を覆った。

向こうでシャワーの音がする。彼がバスタブにお湯を張っているのだろう。ますます辛くなった。

お湯に浸かるとともにシャワーも浴びて、彼はなんとか元気になった。とは言っても、その時は既に昼だった。

ステイヴンの部屋は物が少なく、すっきりしていた。またアパートも新しく、水色の壁紙に、黄色いバラの描かれた絵がコバルトブルーの額縁に入れられて飾られており、白い棚には、本が並んでいるところもあれば小物が置いてあるところもある。彼の部屋は2LDKで、一人で住むには広すぎるくらいだった。

「仲間が時々泊まるから。オレも就職してるし」

ステイヴンが新聞に顔を埋めて言った。

「……あれ、今日の新聞、謎の集団自殺と書かれてる記事があるが……」

それを聞いて、レオナルドはドキッとした。

「——『当初は何者かによる大量殺戮であると考えられた。しかし弾丸の通過した向きや位置により、互いを撃ちあつた形となっている。この事件が発生したのは吸血鬼撲滅組織という謎の集団の拠点らしき場所で、一体何がおこなわれているところであつたかは不明である。しかしある種の魔女狩りのようなもので、特定の人物を邪悪な吸血鬼とみなし、殺害していたと警察は考えている』」って。撲滅組織が減んだのは本当だったんだな」

レオナルドは窓の外を見つめた。

「僕の大事な育ての親がさらわれたんだ、彼らに。助けに行こうと思って、結局滅ぼさせることになった。彼らが僕や母さんを困って撃ち殺そうとしたんだけど、僕は吸血鬼としてこの動体視力で弾丸をすべて避けた。でも、母さんは殺されてしまったんだ……」

それを聞いてステイヴンは目頭をつまんだ。

「……気の毒だな。オレたちが知ってたら協力したのに……」

「ありがとう。でももう大丈夫」

彼はこの間亡き母から言われたことを思い出した。

「本当か？」

「うん」

するとステイヴンは新聞を折り畳んでテーブルに置き、向き直った。

「……ところで、今日はどうする？ 会うか？」

「そうしたいが……」

また飲んでしまうのではないかと思つて言葉が詰まった。

「昨夜と同じことしたら堂々巡りになる。あそこでは何も飲むな。せめて水ぐらいにしろ」

ステイヴンがいさめるような目でこつちを見つめてきた。

「そうだな……」

レオナルドは苦笑して後頭部を軽く搔いた。

その夜また九時、二人はあのバーに向かった。二人とも昨夜と同じ席に座つたが、レオナルドは何も飲まなかつた。ステイヴンは例のカクテルを飲んでしたが、それを見てレオナルドがうらやましがることはなかつたし、昨日のバーテンダーも今日はいなかつた。

「そのボスつてのは、いつも何時ごろ来るんだ？」

「十時頃だな。それより早く来ることはない」

ステイヴンは腕時計を見て時間を確認していた。まだ九時半にも至つていない。

レオナルドは頬杖をついてぼうつとしていた。いや、ぼうつとしていられる時間は長くない。気味の悪いBGMが絶え間なく聞こえてくるし、妙な笑い声や叫び声が頭上を飛び交うからだ。

そんな状態がしばらく続くと、バーの扉が開く音がした。普通の客だろうと思つて彼は振り向かずに行った。

「その連れは何だ？ ステイヴン」

何者かが彼に声をかけた。男っぽい口調だが、やけに声が高い。

「ああ、ボス。早いですね」

ステイヴンが振り向くと同時にレオナルドも振り向いた。

そこにいたのは小柄な女性だった。それもしかしたらアンナよりも小さいくらいだった。

へビメタ的な、露出度の高い服装だった。衣服はすべて黒い革製の生地ですべて統一されており、首や腰からはじやらしやらししたアクセサリーをぶら下げていた。耳にはおびただしい数のピアスをつけ、黒いアイシャドウに暗い赤の口紅だった。黒っぽくて長い髪をまっすぐに下ろし、部分的に赤く染めていた。周りの怪しい人物と見事溶け込んだ格好だった。

「彼は昨日知り合つた新たな吸血鬼です。吸血鬼の研究をしていて、オレたち協力してほしいんだそうです」

ステイヴンが紹介した。ボスの女性はレオナルドを上げ上げと見つめていた。大きくてぱっちりとした目で、まるで武器を隠し持っていないかのようには全身を見まわし、真つ赤なマニキュアを塗つた指で、彼の肩や腰、胸などに触れた。彼はなぜかドキドキしてしまった。

「……名前は？」

彼女が上目づかいで訊いてきた。

「レ、レオナルドだ。宜しく」

「口を慎め」

女性がきつく言った。

「私はSPVの創設者だぞ。私のおかげでどれほどの吸血鬼たちが命拾ひしたか貴様にはわからんだろう。それも知らずに馴れ馴れしく言うな！」

女性の厳しすぎる態度に思わず下唇を噛みしめた彼。女性は彼のあごをつかんでぐいと引き寄せた。冷たい手だった。

「……研究だと？ ふん、私は科学的なものなど信用しないぞ。科学なんて所詮屁理屈をこねるだけのものだ。そのせいで人間は傲慢になって地球環境を破壊してきたんだろう。お前のせんとすることだつてどうせ同じだ」

女性は妙に口角を上げて見せ、そして一気に下げると、乱暴に彼のあごを突き放した。

「SPVの仲間が気安くお前に心を開くと思うなよ。同じ吸血鬼だって、いつ裏切り者になるかわからんからな。あの猫耳みたいにな」

そう言い残して女性は彼らの前を通り過ぎた。同じ仲間だと思つたのに、思ひのほか冷たくされてレオナルドはショックだった。

「初対面の相手には、ああやってけん制するのさ。自分をなめてこないよう

に」

「……………」

ステイヴンがレオナルドをなだめるように優しく言うが、彼はそういうものだろうかと考えていた。

「彼女、自分が小さいことがよっぽど気になってるみたいなんだよ。それに、前に付き合ってた吸血鬼の男が、のちに撲滅組織に入っちゃったのが相当許せないようで……それであんなつらい。ボスの幼馴染に聞いたところの話だけ」

「その男なら知ってるぞ」

女性に冷たくされたことに加えてあの憎い男のことを思い出し、彼は心底気分が悪くなった。

「ジェームズ・アルジェントとかいう男だろう？ 頭のとっぺんに大きな猫耳の生えた。僕もあいつによって大分ひどい目に遭わされた」

「でも彼のおかげであのバッチをもらえて、ほとんどの吸血鬼が救われたって話もあるぞ」

レオナルドは、あのボスのアルジェントとのいきさつが気になった。彼女から話を聞き出せば、本当は彼がどういうつもりだったかわかると思ったからだ。誘われて入ってしまったとアルジェントは言っていたが、そんな程度のことではないような気が彼にはしていた。だが、今聞いても余計に厳しく言われるだけのような気がして聞けなかった。

ボスは丸いテーブルの席に腰かけ、足を組んだ。何を注文することもなく、ただ背もたれに体重をかけて椅子を傾け、前後にゆっくり揺らしていた。彼女の視線は特定の誰かに向けられているようでもなく、まるであさつての方向を見つめるようにぼんやりとしていた。だが少なくとも、誰も受け付けていないような雰囲気だけは、漂わせていた。

「どうするか？ もう帰るか？」

ステイヴンに声をかけられて、彼は気づいた。

「いや、君は彼女……あの人に用はないのか？」

「オレは別にない。あの人と一緒にいても話すことないし……」

レオナルドを見つめていた目が下を向いた。

「SPVって、一体何をしてるんだ？」

ステイヴンは後頭部をポリポリ搔いてしばらく考えていた。

「……っそうだなあ……。実はこれって決まった活動はあまりないんだよ。要は撲滅組織の脅威から逃れるためだった。あと、自分たちがほかの人間と違うところかで、いろいろつらい思いしてるから、そういう気持ちを共有する場であるって感じだな」

レオナルドは妙に顔をかがめてステイヴンに顔を近づけた。そして、まるで彼女に聞こえてはまずいかのように声を潜めて尋ねた。

「あのボスは、あんなにきつくてほかのメンバーは落ち着くのか？」
すると彼は含み笑いをした。

「ふふ、新入りはみんな言うよ。でもな、ああいう人だからこそ、わかってもらえた時は嬉しいんだよ。それは意外性とか、先に怖い思いをしていたから信用しやすくなるとか」

「そういう効果を狙ってああやるのか？」

「どうかなあ。やっぱり、まずは信用できないからけん制しとくってという気持ちのほうが強いきがる」

「そうか……」

彼はもう一度ボスのほうを見た。もういなかった。

「昨日と今日ありがとう。また今度」

「ああ、またな」

バーを後にしたときは既に十時過ぎだった。二人は閑静な住宅街で手を振って別れた。

レオナルドにとってこの二日間はとても貴重だった。まず彼の想像した通り彼以外の吸血鬼たちは特定のコミュニティに属していたということ。次に自分を含めてまともに関わった吸血鬼たちは皆血を吸うのは嫌いだということ。そして、例のコミュニティ、つまりSPVのメンバーたちはあの怪しい

バーに集まるということだった。

また彼は、既にステイーヴンの連絡先を聞いていた。今後連絡を取るときは、電話なりメールなりでできる。情報を得る準備は十分すぎるほど整った。

彼は帰宅して、アンナに電話した。

「……そう、すごいじゃない！ 粘って探し続けた甲斐があったわね！」
彼女は喜んでくれた。

「ああ。ホントに。ただ、向こうのメンバーと上手くやれるか心配だ。なかなか気難しい人もいるようだし、全員から情報を得ないと確実な証拠が得られない……特にボスがなあ……」

「ボスが怖いのか？」

彼はしばらく下唇を噛んでいた。

「ちょっとなあ……会うなりいきなり厳しくされたから……ちよつとも言葉の間違えただけで口きいてもらえなくなりそうだ……」

「あなたとしたことが珍しいこと言うのね」

アンナは目を丸くした。
「でもとにかく、行けるのはあなただけだから、頑張って聞いてきてちょうだい」

「うん……君の兄さんと付き合っただけのこともあるそうだからな」

「なんですって?!」

アンナの声が急にキーを上げた。

「お兄さん、SPVにもいたってことなの？」

「まあ、そういうことだろうな。僕には何となく納得できる」

レオナルドは少々冷たい口調になった。

「だから彼女から聞き出すよ。ホントはあいつはどういうつもりだったのかってことも」

「……お願い。そうして」

彼女が震える声で頼むと、電話は切れた。

「何だった？」

アンナの傍らにいたマイクが怪訝そうに尋ねた。

「お兄さん、SPVのボスの女の人と付き合ってたことがあるんだって……」
彼女は妙に怯えた表情をしていた。

「どうした？」

異変に気付いたマイクが心配した。

「……なんでもないの。大丈夫」

そう言っただけで彼女は研究室を出た。

「……どうしよう」

彼女は胸にぽっかり大きな穴が開く思いだった。

アルジェントは彼女にとつて兄である。血縁はないが、そういう関係性だ。血縁がないからだろうか、兄が彼女の元から去った後でほかの女性と関わっていたことがアンナにとつて何となくショックだった。SPVにいたのに撲滅組織に入ってしまったことより（撲滅組織に入ってしまったのはある意味しかたがないところもあったので）、彼女の知らないところで兄が交際していたことの方がどことなく嫌だった。

別に兄を責めるわけではない。彼からしてみれば妹と思うのと交際相手だと思っただけのことぐらい彼女にもわかる。しかし、「血縁がない」故に、やはり彼女も関係上の兄に対してどこか「他人」の感覚が残っていた。だからなんだか裏切られたような気がするのだろう。彼女はそう考えて、自分を落ち着かせようとしていた。

「またお前か？ 懲りずに来たものだな」

例のバーで声をかけられたボス——ジュリア・レアンは、椅子に座って足を組みながら、声をかけたレオナルドを一瞬だけ見やった。

「研究のためです。いろいろ教えてください」

レオナルドはまるで記者のようにメモを構えて彼女の脇に立っている。

「……研究してどうするつもりだ？」

上目づかいで彼を睨んだ。

「僕たち吸血鬼の存在を、世間の迷信や伝説から守るためです」

彼は此処で毅然として言った。するとジュリアの表情が一瞬変わった。しかしまたすぐに厳しい表情になった。

「私の話を聞いて、一体どうやって研究に役立てられるんだ？ みんな別々の個性の持ち主だぞ。そこから法則性を導き出せるとでも思ってるのか？ お前は吸血鬼はそんなに単純な奴らだと思ってるのか？」

レオナルドは一瞬眉をひそめた。

「違います。ただ僕は、この血を吸う行為は精神的な病気だと考えてるんですよ。その決定的な証拠を集めるためには、あなたをはじめSPVのメンバー全員に僕の質問に答えてほしいんです」

だが今度は彼女は構えたままだった。

「証明したらどうするんだ？ 差別と偏見にまみれた精神病院へ私たちを放り込むつもりか？」

「それが出来ればまだいいほうです。僕たちのことを知っている人はごく僅かです。学会とかに発表しても僕たちを狂人と思う人が多く出るでしょう。

それで下劣な週刊誌に書かれたり、吸血鬼を誤解して憎む人たちが僕たちを襲ってきたりすることのほうが恐ろしいんです。証明できるほどに研究が進んだら、その時はその時で何とかします」

彼自身だって、その後のことは不安だ。マイクが発表してくれるにしても、彼が命を狙われることは十分考えられる。

「不安定な研究だな。少なくとも私は応じないぞ」

ジュリアはそっぽを向いた。

「それじゃあ困るんです。もしかしたらあなたに限って何か例外があるかもしれないんですから、そしたら検証にならないでしょう？」

「それを言ったらお前、外国の吸血鬼についても調べなきゃならんぞ。その点はどうなってるんだ？」

彼は押された。

「……聞いた話ですが、イギリスは世界に例を見ないほど吸血鬼が多いんだそうです。今ここでせっかく吸血鬼たちが集まっているのですから、少なく

ともここだけでも情報を得たいんです。そこで確信を得たら、またうまくいったら、海外にでも調査の依頼をするつもりです」

その時、彼女はこの間彼の体をチェックしたときのように、顔を近づけた。「……ところでお前、研究は一人でやってる様子じゃないな。誰かとやってるのか？」

それでは許さんという表情だったので、彼は戸惑った。しかし悪いことをしているわけではないので、正直にすべてを話した。

すると彼女はものすごい剣幕で彼の頬をびしゃりとたたいた。

「貴様！ 要はおとりなんだな！ そのマイクとかいう男の策略ですべてを語らせて、私たち吸血鬼を滅ぼす企みをしてるんだらう！ お前は研究チームの唯一の本物いうことで此処に派遣されたんだな！」

「もしそういうことだとしたら、私は正直に話さないだろ！ 何をそんなに嫌悪するんだ？ 同じ仲間じゃないか！ 要はあなたは何を言いたいんだ！」

レオナルドの堪忍袋の緒がついに切れた。彼は敬語を使うのをやめ、同等の口調で言った。彼は、こうまで疑ってかかる相手に、もやは大人しくしている理由などないと思った。

怒鳴られて、ジュリアは下を向いた。長い前髪を垂らして何かぶつぶつ言っていた。唇がわなわなと震えた。

「……お前に何がわかる……！」

騒がしい周囲の中、唯一それだけが聞こえた。彼女は立ち上がって彼に体当たりしながらバーを出て行った。

そのとき、彼は初めて気づいた。彼女にはまるで銀色の狐のような尻尾が生えている。確か彼女には獣の耳らしきものはなく、普通の人の耳たぶだったはずだ。どうだろうか。

帰宅してから、彼はステイヴンに電話で訊いてみた。

「ああ、知ってるよ。でもなんでだかはわからない。みんな陰では『尻尾のボス』なんて呼んでるけど、本人の目の前では絶対言っちゃいけないことになってる。それはあの人の逆鱗に触れるようなものだから」

「……それが原因なんじゃないのか？ あのきつきは……」

「……実はみんな薄々そんなことは考えてた。でもあらかじめ言っちゃうと、

あの人にそれを聞こうとするやつが出てきて『お前チクつたろ?』とボスに睨まれちまう。だから気づいたやつにそっとオレたちが教えるってことにしている」

「でも僕は訊くぞ。すべては調査のためだ」

レオナルドは半ば開き直って言ってやった。

「お前、ほどほどにしとけよ。いくら研究のためだとは言っても、本気で口きいてもらえなくなると困るぞ」

ステイヴンは呆れているのか、不安な声色になった。どうやら彼にとっても、レオナルドはちよつとした厄介者であるようだ。

ところがその数日後、彼はあのボスの家と呼ばれた。ステイヴンに案内され、やってきたのは立派な豪邸だった。来たのは初冬の夕方、東の空は既に暗くなっている。薄暗いが、彼にははっきりとその屋敷の姿が確認できた。こんな一軒家に、本当に一人で住んでいるのだろうかと彼は疑った。

彼らがやってきたときには、既に何人かの吸血鬼たちも来ていた。アンテイクな花柄の絨毯が敷かれた広々とした居間に、朱色のゆつたりとしたソファが、これまたアンテイクな丸いテーブルを囲うように置かれていた。

吸血鬼たちには、ソファに腰掛ける者や壁に寄りかかっている者もいて、新入りが久々なのか、後から入ってきたレオナルドを珍しそうに見つめていた。

「こいつは吸血鬼の研究をしたいとかぬかしているレオナルドという男だ。一応私たちと同じ吸血鬼ではあるそうだが、無理に仲良くしてやる必要はないからな」

彼は皆の前に立たされ、ボスにそつげなく紹介された。やはり依然として彼女は彼を好いていないようだった。彼はどういう態度で立っていればよいのかわからず、上着のポケットに手をつ込み軽く俯いていた。

吸血鬼たちは、彼女と格好を似させている者も随分いた。派手なピアスやタトゥ、シルバークセサリ、襤褸を思わせるびろびろとした服装が嫌でも目に飛び込む。しかし、ステイヴンのように、ごく普通の格好の者も、

あまり多くないがそこそこいた。

「研究って、具体的にどんな感じだ?」

肩に立派なタトゥを入れた筋肉隆々の男が訊いた。頭の両サイドを剃り、まるでニワトリの鶏冠のようなモヒカン頭で、いかにも近寄り難い風貌だ。レオナルドの目の前に座り、前かがみになって少し上目遣いだった。

「僕たちが、何故吸血鬼と化してしまうかの原因を探るためだ。それがわかれば、撲滅組織のような愚かな連中の魔の手から逃れられるかもしれないだ」

彼は訴えるように通る声で叫んだ。すると周りがざわめき始めた。

「そんなことがわかんのかよ?」

「ウチらは血を吸う特殊な種族なんじゃないの?」

「なる前なんて知らねえよ……」

「今の時代ですらこうなんだから今更……」

彼らには不安と、わずかな期待の表情が浮かんでいた。それと同時に、彼の頭の中には、ある考えが浮かんできた。それは、今日の前にいる吸血鬼たちが他人を寄せ付けないような格好をしているのは、「どうせ自分たちは他の人間とは違うんだ」という開き直りから来ているのではないかということだった。

彼はちらつとボスを見た。

彼女は棚に肘を乗せて彼らを見つめている。格好に似合わない銀色のふさふさした尻尾は、苛立っているかのように棚にボンボン打ち付けている。

「静まれ」

彼女は半ば投げやりな声で言った。吸血鬼たちは話をやめ彼女のほうを向いた。

「レオナルド、お前は外れる」

「な……なんで?」

「私の指示に従え!」

噛み付くように怒鳴られ、険しい顔で背中を押されて彼は部屋の奥にある扉の向こうに押し込まれてしまった。何にもない小さな薄暗い部屋だった。

「私が開けるまで出てくるな!」

彼女はそう怒鳴って、乱暴に扉を閉めた。

彼は下唇を噛みしめ、何か熱いものがこみ上げるような気がした。噛んだ唇が、紫色ににじむのも構わずに、噛む力は徐々に強まっていく。彼はゆっくり床にひざをつき、向こうの様子を聞こうとした。

「……………いいか？　くれぐれもあいつに正直なことを言うなよ。あいつは正直に言うふりをして私たちを騙す気なんだ。……………これまで何度もあっただろう？　私たちは……………本当は心を開きたいがために……………優しく声をかけてくれる奴には心を委ねたくない……………でも……………それが災いのもだった……………信頼できるのは私たちだけだ……………余計なこと言う奴はもう信頼できないんだ……………わかるだろう？　だから気をつけろ。あいつに何か聞かれても適当に言うてごまかせ」

彼女の声が、途中から震えだしてきたことを彼は気づいた。だが、聞いていて気がかりな点があった。

もし本当に彼に聞かれて欲しくないのなら、彼が来る前に話すはずである。確かに彼が来たときはステイヴンも一緒だったが、彼にこっそりメールなり電話なりすることだって出来るはずである。それをなぜ敢えて、此処で、しかもドアの向こうから耳を澄ませば聞こえてしまうところに追いやつてから、あんな話をするのだろう。

しばらく沈黙が走った。何一つ物音がしない静寂な時間が流れた。その後、ようやく扉が開いた。

「……………入れ」

ボスが声を押し殺して言った。俯いていて顔が良く見えない。彼を皆の前に戻しても、彼女は彼を後ろに立たせたまま、黙っている。だがその様子はどこか彼を気にしているようだった。

「レオナルド、お前はもう帰れ」

「え？　もうですか？」

と言ったのはさっきのモヒカン男である。レオナルドはその彼の顔を見た。「もう少し彼の話を聞くぐらいしたっていいんじゃないですか？」

彼はこのモヒカン男が実は割と人懐っこい性格なのではないかと思った。「いい。今日はもうその必要はない。ステイヴン、こいつを送ってやれ。」

そのあとまたお前だけは戻ってこい」

ボスはレオナルドを指さしながらステイヴンに指示した。

「はあ……………」

彼はどこか割り切れないように生返事をして後方のソファから立ち上がった。レオナルドに近づき、そつと手を引いた。

「それじゃあまた後で」

軽く振り向いてそういうと、彼を連れて屋敷を出た。

日はすっかり落ちていて、やけに大きな満月が煌々と輝いていた。その満月の逆光でもうほとんど葉のない木がシルエツトとなって見える。

「さあレオナルド、行こう」

ステイヴンに声をかけられ、彼は歩き出した。しかし何となく気が進まなかった。

「ステイヴン、ボスは僕をどう思っていると思う？」

レオナルドは不安だった。ステイヴンもしばらくは答えなかった。

「……………いまのオレにはなんとも言えない。ただ、たぶんボスはまた君を呼ぶと思うよ」

少しレオナルドには信じられなかった。

「……………そうかなあ」

「ああ。あの感じなら君を見捨ててはいないね」